

平野屋新田会所跡

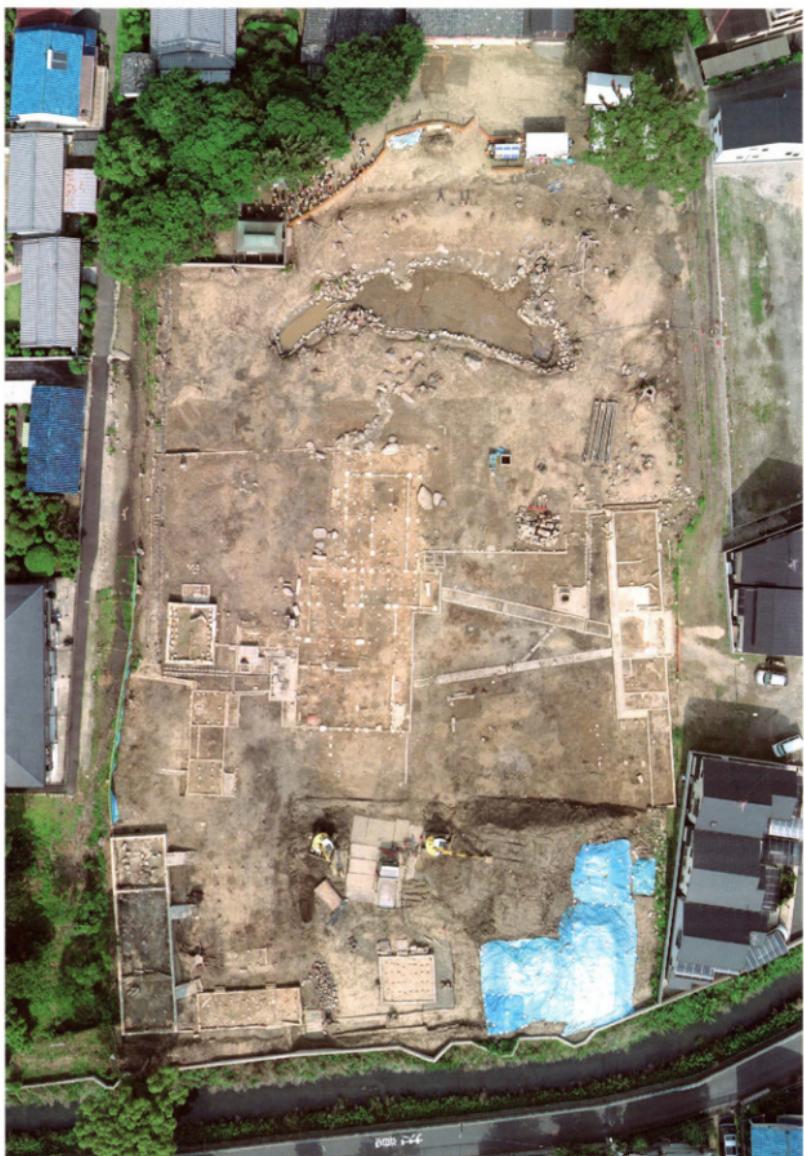
確認調査概要報告書



会所表長屋門

2010年3月
大東市教育委員会

卷頭図版一 会所航空写真



卷頭図版二
解体前の会所



序 文

かつて、大東市の平野部には、深野池と呼ばれた大きな池が存在していました。江戸時代の学者、貝原益軒の『南游紀行』によれば、池の大きさは南北二里、東西一里もあったとされています。

しかし、池が存在したのも江戸時代中期頃までのことで、宝永元(1704)年の大和川付け替え工事により、旧大和川筋では新田開発が進み、深野池でも開発工事が行われ、広大な新田が誕生します。これ以降、本市は大都市大坂の近郊農村として発達を遂げ、今日に至っています。この意味において、深野池の新田開発は本市の礎を築いたといっても過言ではありません。

開発工事は東本願寺難波別院により着手されますが、工事が完了すると平野屋や鴻池といった当時の有力商人らが新田の所有者となり、その経営に乗り出して来ます。彼らは出先機関として「会所」と呼ばれる建物を設置して、そこに支配人を置き新田の管理・運営にあたらせました。

平野屋新田会所は深野池に開かれた新田のうち、深野南新田と河内屋南新田の管理・運営のために設けられたものです。つい最近まで、広い屋敷地には樹木が鬱蒼と生い茂り、主屋や土蔵、正面には立派な長屋門が建っていました。現存する会所建物は、鴻池新田会所等、府下でも数箇所しかなく貴重なものであるため、教育委員会ではその保存に努めましたが、残念ながら諸事情により建物は取り壊され、樹木も伐採されてしまいました。

とはいえ、会所は新田開発の象徴であり、本市の歴史を語る上でも欠くことのできない、貴重な文化財であることには変わりなく、教育委員会では解体後の状況を確認するための調査を実施いたしました。調査の結果、そこにはまだ礎石や遺構が良好に残り、会所の貴重な歴史が刻まれていることを確認できました。その成果をまとめたのが、本書です。短期間の調査ながら、建物の複数回の建て替えや船着場が遺存していることが確認ができ、得られた知見は今後、会所を研究する上で大いに役立つものと考えています。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位、関係機関、地元の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月
大東市教育委員会
教育長 中口 馨

例　言

1. 本書は大東市平野屋1丁目に所在する平野屋新田会所跡の確認調査概要報告書である。
2. 調査は平成20年度国庫補助事業として、大東市教育委員会生涯学習課が実施した。
3. 現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課の応援を受けて、大東市教育委員会生涯学習課黒田淳を担当者として、平成20年5月9日から同年6月13日まで実施した。
4. 本書の執筆・編集は黒田が行った他、第4章については大阪府教育委員会松岡良憲がその一部を執筆している。
5. 本書で使用した標高は東京湾平均水面(T.P)、座標は世界測地系国土座標第6座標系、方位は座標北である。
6. 現地での作業は株式会社島田組、写真測量は株式会社アコード、現場写真撮影の一部を有限会社阿南写真工房に委託した。また報告書作成にあたり、遺物実測及び版下作成は株式会社地域文化財研究所、遺構図面の作成は特定非営利活動法人環境デザイン・エキスパート・ネットワークにそれぞれ委託した。
7. 出土品及び図面・写真等の記録類は、大東市教育委員会において保管している。
9. 調査の実施並びに本書の作成にあたっては、以下の方々及び機関のご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

栗野隆、伊藤正義、井上伸一、大山えりか、樋原和彦、佐久間貴士、関真一、地村邦夫、土橋正彦、平澤毅、藤永正明、松岡良憲、宮崎泰史、三好玄、森屋直樹、藪田貫、吉田高子
文化庁、奈良文化財研究所、大阪府教育委員会、大阪産業大学
株式会社住、平野屋地区

本文目次

第1章 地理的歴史的環境	1	第4章 調査成果	5
第2章 経緯と調査方法	1	第1節 遺構	
第1節 調査に至る経過		第2節 遺物	
第2節 調査方法		第5章 まとめ	33
第3章 平野屋新田会所の概要	4	報告抄録	
第1節 歴史的背景			
第2節 解体前の会所屋敷			

挿入写真

写真1 主屋建物礎石(1)	9	写真2 主屋建物礎石(2)	10
---------------------	---	---------------------	----

表

表1 遺物観察表	29	表2 新田会所対照表	34
----------------	----	------------------	----

挿図目次

第1図 大東市位置図	1	第15図 井戸①平面図・立面図・断面図	17
第2図 大和川付け替え前の様子	2	第16図 井戸②平面図・立面図・断面図	17
(深野池と新開池)		第17図 西側堀基礎平面図・立面図	18
第3図 大正7年写し会所絵図	3	第18図 船着場平面図・立面図・断面図	19
第4図 主屋建物渡り部平面図・立面図	5	第19図 調査地東西方向断面図	20
第5図 主屋建物平面図・立面図	6	第20図 国産磁器実測図	21
第6図 会所全体図	7～8	第21図 国産陶器・土製品・ガラス実測図	22
第7図 表長屋門平面図	11	第22図 軒丸瓦・丸瓦実測図	23
第8図 表長屋門居宅部分平面図	12	第23図 軒平瓦・半瓦・井戸瓦実測図	24
第9図 裏長屋門平面図・立面図	12	第24図 石製品実測図	25
第10図 土蔵①平面図・立面図	13	第25図 銭貨拓影	25
第11図 土蔵④平面図・立面図	13	第26図 金属製品実測図	26
第12図 土蔵②平面図・立面図	14	第27図 木製品実測図(1)	27
第13図 土蔵③平面図・立面図	15	第28図 木製品実測図(2)	28
第14図 池～築山①平面図・断面図	16		

卷頭図版

卷頭図版一 会所航空写真

卷頭図版二 解体前の会所

図版目次

図版一 会所全景

図版十二 庭園(1)

図版二 主屋建物(1)

図版十三 庭園(2)

図版三 主屋建物(2)

図版十四 池(1)

図版四 主屋建物(3)

図版十五 池(2)

図版五 主屋建物(4)

図版十六 井戸

図版六 表長屋門

図版十七 墀

図版七 裏長屋門

図版十八 船着場

図版八 土蔵①屋敷藏

図版十九 その他・周濠トレーンチ

図版九 土蔵②米蔵

図版二十 遺物(1)陶磁器類・土製品・石製品・

図版十 土蔵③道具蔵

ガラス製品

図版十一 土蔵④

図版二十一 遺物(2)瓦

図版二十二 遺物(3)木製品・金属製品

第1章 地理的歴史的環境

平野屋新田会所跡の所在する大東市は大阪府の中部にあり、河内平野のはば中央部に位置している。市域の周囲は東南端の一部で奈良県生駒市と接するほか、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市、南は東大阪市に接している。市域の面積は約18.27km²で、人口127,982人(平成22年2月末現在)である。

市域の東半分は生駒山系による山地・丘陵地で占められており、市街地のすぐ背後には標高314.3mの飯盛山が存在する。およそ西半分は標高約1～5m足らずの平地がほとんどで、河内平野全体からしても、最も低い場所となっている。

山地・丘陵地と平野部との間には飯盛山から流れ出す中小河川によって形成された小規模な谷口扇状地が見られ、そこでは標高9～20mの微高地が形成されている。平野部は沖積層から成り、地盤の悪い低湿地性の粘土やシルトが堆積しているが、これは縄文時代前期～中期頃に起こった海進現象により生駒山麓際まで海水が入り込み、かつて河内平野全体に広大な湾(河内湾)が形成されていたことに起因している^(註1)。その後、河内湾は淀川や柏原方面から北流していた旧大和川の分流である諸河川^(註2)の堆積作用と水域の後退等で、上町台地を境として外海と隔てられるようになり、弥生時代前期頃には次第に淡水化が進み潟(河内潟)となっていたが、さらに古墳時代頃になると完全に外海と隔てられるようになり、淡水湖(河内湖)となっていた。この湖は古代末～中世にかけてその範囲が縮小し、「勿入潟(ないりそのふち)」^(註3)や「廣見池(ひろみいけ)」^(註4)等の名称で呼ばれるようになり、近世初頭頃にはさらに規模が縮小し、本市の平野部では深野池と呼ばれる池となっていた。深野池には前述のように南からは大和川の分流である諸河川、北からは寝屋川が流れ込んでいたが、河床は次第に高くなり、大雨の度に堤防の決壊が相次ぎ、流域や深野池の周辺は水害が絶えない地域であった。しかし、江戸幕府の治水対策として、宝永元年(1704)に行われた大和川付け替え工事で、深野池では新田開発が行われその姿を消し、本市の現在の地形が出来上がった。

第2章 経緯と調査方法

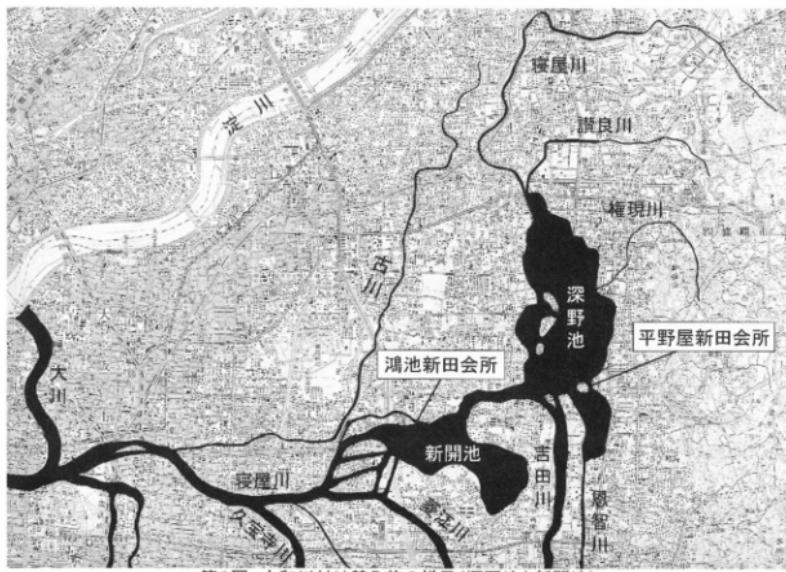
第1節 調査に至る経過

平野屋新田会所跡は大東市平野屋1丁目315番地に所在する。敷地の西側には錢屋川が流れ、南側は大阪から奈良へ通ずる古堤街道が通り、また、周辺の水路には弘化2年(1845)の銘が刻まれた通称「三反物(さんだんもん)の樋」や「どんばの伏せ越し樋」等の樋門が存在し、近隣にはかつてこの新田の小作人であった子孫の家が残っている。最寄りの駅(JR学研都市線住道駅)からある程度の距離があったためか、高層建築物による開発がされておらず、それらを含めた周囲の景観は、新田開発当時の原風景が比較的保たれているといえる。

大木が生い茂る屋敷地の南面には表長屋門、北面には裏長屋門を構え、敷地内には大きな主屋や土蔵が建っていた。この会所は、江戸時代中期の新田開発に伴い設置されたもので、国史跡に指定されてい



第1図 大東市位置図



第2図 大和川付け替え前の様子(深野池と新開池)

る鴻池新田会所^(注5)と同様の機能を持つもので、新田開発の歴史を語る上で貴重なものであった。本市でもその重要性から保存の方法を模索してきたが、当時の所有者の諸事情により大阪地方裁判所の強制競売の対象となっており、その動向を見守りつつ競売の結果を待って、今後の方向性を示すこととなっていた。競売は平成18年12月20日から27日に期間競争入札が行われ、平成19年1月9日に開札、同年3月15日に売却決定がなされた。その後、新所有者との取得交渉を行ったが合意に至らず、平成20年1月に樹木伐採、建物の解体工事が開始されたため、再度交渉を持つが不調に終わった。平成20年1月17日付で周知の埋蔵文化財包蔵地「平野屋新田会所跡」として登録し、解体工事期間中は市教育委員会が現場立会を行っていくこととなった。解体工事、樹木伐採は平成20年2月末までにかけて行われ、現存していた建物についてはすべて取り壊されてしまった。ただ建物の礎石や庭園等、会所を構成する主なものは遺構として遺存しており、所有者の協力を得て、遺存状況の確認調査を平成20年5月9日から同年6月13日に実施した。

なお、調査期間中の平成20年6月8日には現地説明会を実施した他、平成21年2月11日には、この調査成果を踏まえて、「平野屋新田会所その歴史と意義を考える－新田開発と会所－」と題したシンポジウムを開催した。(平成20年度国庫補助事業)

第2節 調査の目的と方法

確認調査着手時における平野屋新田会所跡の状況は、主屋や土蔵等の建物が取り壊され、また、大半の樹木が伐採された後、部分的に根株が掘り起こされ、藤蔓や雑草が生い茂る中に瓦礫が散乱した状態であった。この様な状況で実施する調査の主要目的として、以下の項目について留意した。

- ①建物解体後、礎石や石積み等の遺存状況の確認。

②建物解体時、既に埋没した状態であった庭園・周濠・船着場等の遺存状況の確認。

③未知の遺構の有無の確認。

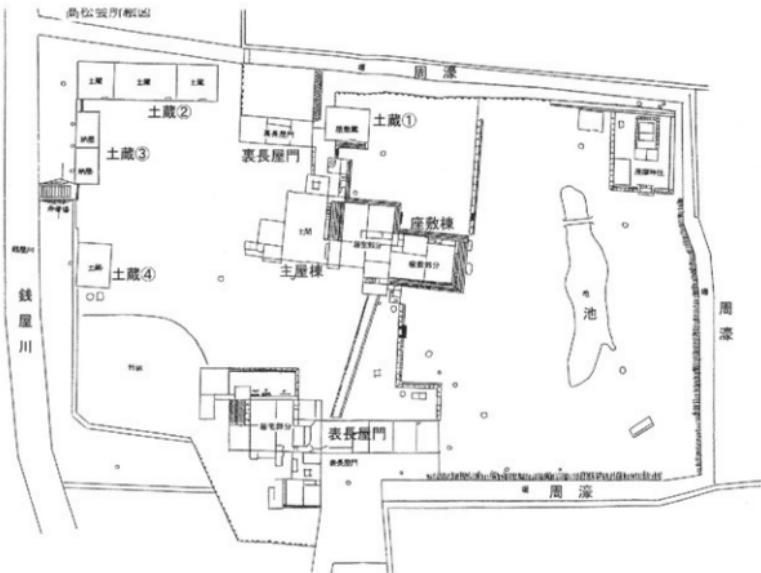
①については、先行して解体時に堆積した瓦礫や赤土を除去しなければならず、これらの作業にかなりの労力と時間を要するものであった。そこで瓦礫除去と必要最小限の堆積物除去を建物跡全体について実施することで遺存状況の把握に努めた。

②については、周濠以外は遺存状態を明らかにするため、部分ではなく全容を確認することとし、可能な限り堆積物を除去することとした。周濠については既に絵図等で凡その位置と規模が推測可能で、それらを考慮に入れ、遺存状況を確認するため屋敷の西側(銭屋川)を除く北・東・南の周濠部分3箇所でトレーンチ調査を実施した。

③は銭屋川側の空間地・表長屋門北側の空間地・裏長屋門北側の空間地・庭園跡北側の空間地等の表土を掘削し、絵図に描かれている建物の礎石や柱穴等の遺構の確認に努めた。特に船着場については、銭屋川の護岸改修工事の影響をどれだけ受けているのかを確認する必要があった。

今回の調査は期間が1ヶ月に限られていたため、掘削作業は、重機による掘削と人力掘削を併用し、また、実測作業についても、作業の効率化を図るため、平面実測は空中写真測量による図化を行った。但し、詳細な立面図や断面図については、今回の調査では計測を見送ったが、大阪産業大学人間環境学部土橋正彦教授の申し出により、レーザー光線による3D測量を実施していただいた。現場での計測条件にもよるが、データを処理すれば調査後でも調査区全体の断面図はもちろん石積み等の立面図の作成もある程度可能ということであった。

また、今回の調査はあくまでも現況の確認調査であるため、礎石等の掘り起こしや移動は一切行っていない。調査終了後は所有者の希望もあり、排出土を使用してできる限り遺構に被せている。



第3図 大正7年写し会所絵図

(『旧平野屋新田金所慶敷と諸物』2002 大東市教育委員会に加筆)

第3章 平野屋新田会所の概要

第1節 歴史的背景

宝永元年(1704)に行われた大和川付け替え工事は、これまで幾筋にも分かれ、河内平野を北流していく大和川を直線的に堺へ流すようにしたもので、付け替え工事後、旧河床跡や池跡で新田開発が行われ、34箇所の新田が誕生した。現在の東大阪市域に存在した新開池とともに、大東市域でも深野池で新田開発が進められた。

深野池の主要部分である深野新田の開発は、付け替え翌年の宝永2年(1705)から開始され、企事業が終了したのは正徳3年(1713)で、約9年間の期間を要している。この開発に先立つ宝永元年(1704)、南北に長い深野池の北と南部分が河内屋源七により開発され、河内屋北新田・河内屋南新田が誕生している。開発は当初、東本願寺灘波別院の講員により入札、献納されたもので、宝永2年から開墾された。享保4年(1719)の再検地時では、深野新田は3分割され、これらの新田の所有は、いずれも大坂市中の商家に移っており、河内屋北新田が鴻池新十郎、深野北新田、深野(中)新田が鴻池又右衛門、そして、深野南新田、河内屋南新田が平野屋又右衛門^(註6)の所有となっていた。

会所は、所有する商家が出先機関として設置したもので、現地に支配人を置き、新田の管理・運営等の業務にあたらせた。この時期の各新田にはこのような会所が置かれ、このうち平野屋新田会所は、名前の通り、平野屋又右衛門が所有した深野南新田、河内屋南新田の管理・運営のため設けられた施設である。

平野屋新田会所が設けられた正確な時期は明らかではないが、平野屋新田会所文書中^(註7)の享保4年(1719)から5年(1720)に書かれた「諸方相対証文控」に平野屋会所の文字が見られ、また、享保13年(1728)大坂市中から当会所に分祀された坐摩神社^(註8)について書かれた「鎮守御宮御祭礼之控」にも平野屋会所の文字が出てくることから、18世紀前半までの新田開発が終了した時点で既に存在していたことが推定される。

その後、所有は延享2年(1745)大坂上町船越町両替商助松屋忠兵衛^(註9)に移り、次いで享和3年(1803)天王寺屋八重(後に天王寺屋源助^(註10))に、そして文政7年(1823)には最後の所有者である大坂北九太郎町銭屋(高松)長左衛門^(註11)の手に渡る。その後の経過は前述の通りである。

第2節 解体前の会所屋敷

解体前の平成12・13年に会所の建物の調査を実施(報告書^(註12)は平成14年に刊行)している。以下はその報告をもとに記述する。

屋敷地は東西約90m、南北約60mを測り、南面西寄りに表長屋門、北面西寄りに裏長屋門を設けている。「大正7年なし絵図」^(註13)によると、屋敷地の西側は銭屋川、残り3方は濠で囲まれた形態で、濠は銭屋川と繋がっていたものと推定され、北側と南側で濠の痕跡が確認できた。北東に鎮座する坐摩神社は、本来屋敷地内であったが、現在はその境内も含めて屋敷地外となっている。境内部分は東側の濠が廻る部分で、既に埋められた状態であったが、神社東側にある庭地部分(通路として利用されている)にその痕跡が認められる。

銭屋川側には、屋敷専用の船着場があり、絵図には川へ降りて行く階段が示されているが、解体時には既に埋没した状況であった。

主屋建物は屋敷地の中央部に建てられており、西側が二間のある主屋棟、東側が庭園に面する座敷棟

から成る。また、絵図に見られる主屋棟南西部に付属していた建物については、建物調査時の段階で既に無くなっていた。

座敷棟に面して、東側に造られた庭園には瓢箪形の池があり、絵図には池の北部分に橋が設けられていたように描かれているが、この橋も既に存在していなかった。この時期に造られた会所と同規模の屋敷のほとんどが東側に庭園を持つが、これは生駒山を借景にして庭園を造るために、鴻池新田会所の庭園も同じ配置となっている。

その他、絵図と比較すると、道具蔵の南に土蔵が存在していたことと、表長屋門の西側に管理・居住棟が接続していた点が異なるが、建物の配置に大差はない。

また、座敷棟には棟札が残っていたので、明治25年に上棟されたことがわかっている。これは前年の明治24年の濃尾大地震により座敷棟が被災し、座敷棟を建て直したものと推定されている。なお、この棟札^(注14)については、解体時に本市教育委員会で回収し保管をしている。

建物調査報告による各建物の状況は以下の通りである。

(主屋建物)

- 主屋棟 桁行9間(17.73m)、梁行5.5間(18.4m)、ツシ2階建南面。西面・切妻造、東面・入母屋造、棟瓦葺(もと本瓦葺)・2段葺、南面土庇・棟瓦葺(もと本瓦葺)。
南面玄関角部屋、入母屋造、棟瓦葺。北面・井戸屋角部屋
座敷棟 桁行6.25間(12.31m)、梁行4.5間(9.13m)、平屋建、南面。
主屋棟東面南側に接続、西面・切妻造、東面・寄棟造、2段葺、棟瓦葺。南面・東面土庇

(附属建物)

- 表長屋門 桁行11間、梁行2間、切妻造、棟瓦葺(もと本瓦葺)、南面。
裏長屋門 桁行6間、梁行2間、切妻造、棟瓦葺、北面。
土蔵①(屋敷蔵) 土蔵造、2階建、桁行5間、梁行3間、切妻造、棟瓦葺、南面庇附属。
土蔵②(米蔵) 土蔵造、桁行11間、梁行3間、切妻造、本瓦葺。
土蔵③(道具蔵) 土蔵造、桁行6間、梁行2間、切妻造、棟瓦葺。

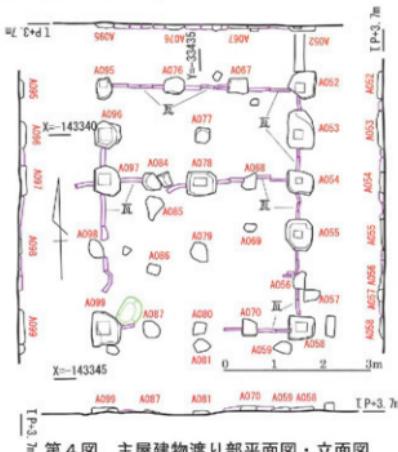
第4章 調査成果

第1節 遺構

1. 主屋建物

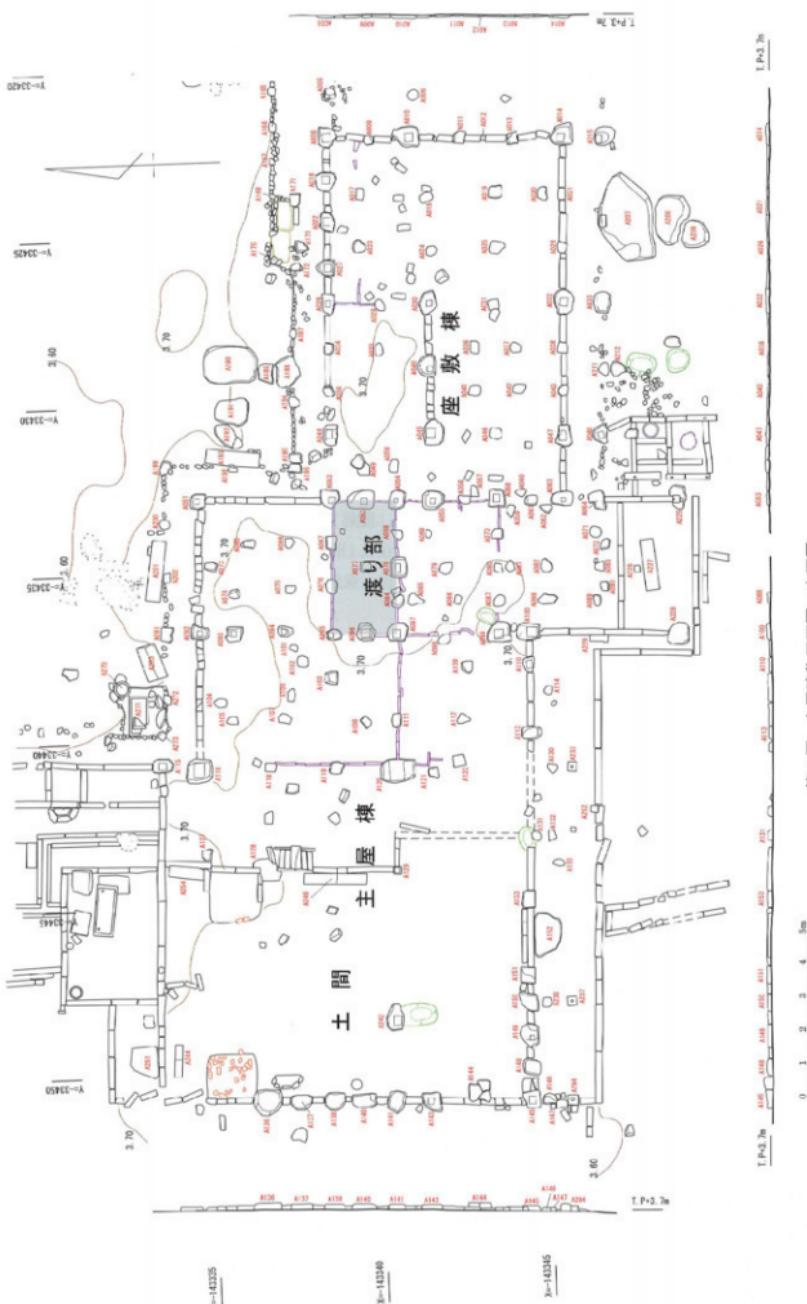
屋敷地の中央に建てられていた東西方向棟行約31m、南北方向梁間約15mを測る東西に長い建物で、土間のある西側の主屋棟と東側の座敷棟から成る。

当初は主屋棟と座敷棟が別棟であった(平成14年3月の上屋建物調査報告)と考えられており、今回の発掘調査においても棟行7間・梁間5.5間の主屋棟、棟行6.25間・梁間4.5間の座敷棟が、幅1間・長さ2間の「渡り部」で繋がっていたと推測される礎石配置を検出した。この渡り部はその後、前後に玄関・中の間・茶の間を増築し、渡り部自体は押し入



第4図 主屋建物渡り部平面図・立面図

第5図 主要建物平面図・立面図



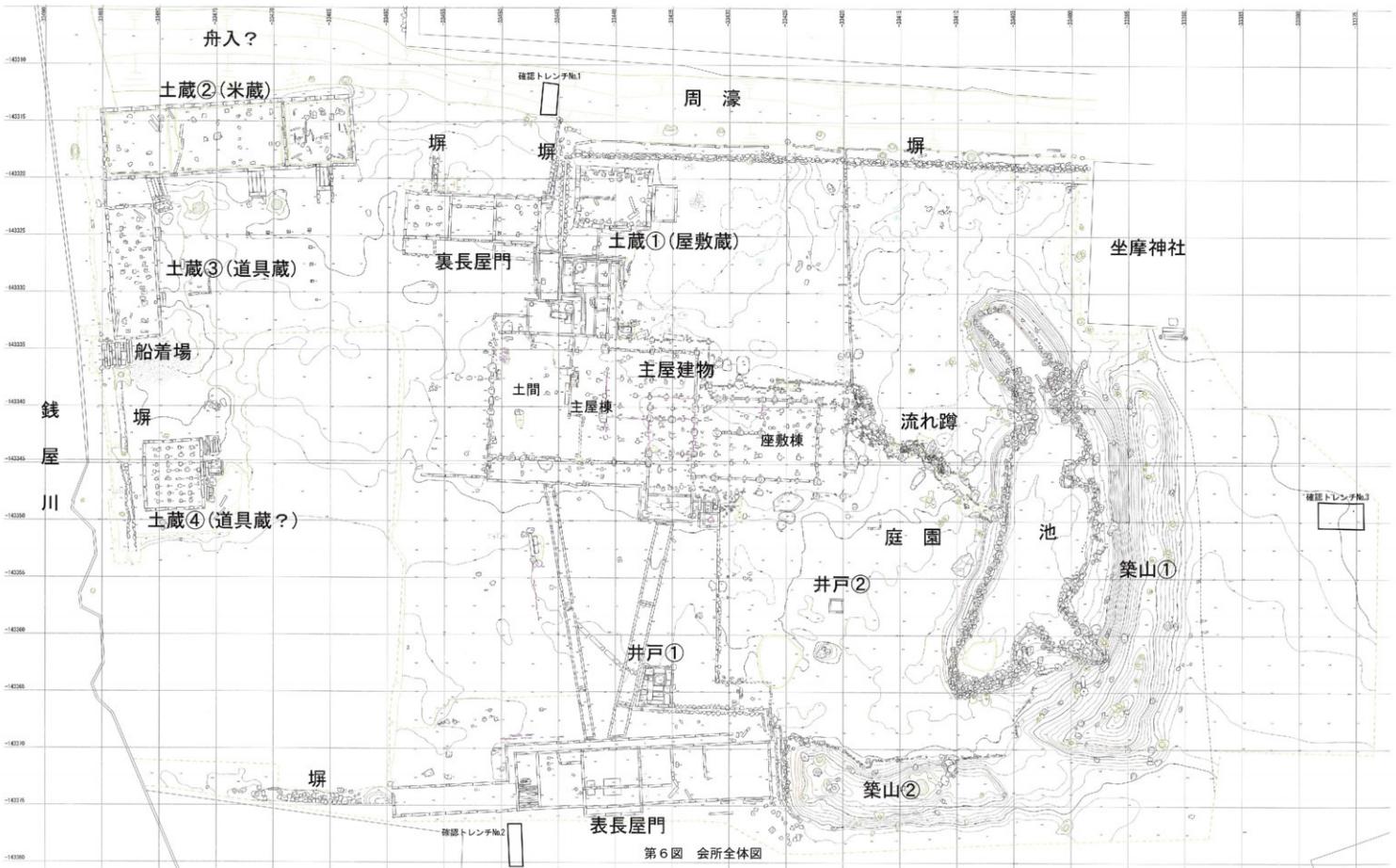




写真1　主屋建物礎石(1)



写真2 主屋建物礎石(2)

れ・床等に改築されたものと考えられる。年代としては平成14年3月の報告にあるように、発見されている棟札より座敷棟は、明治25年(1892年)の上棟とされ、主屋棟はこれ以前、18世紀中頃まで遡る可能性を指摘されている。となると「大正7年写し絵図」では繋がった1棟の建物として描かれており、明治25年から大正7年の間で増改築され1棟の「主屋・座敷棟」となったものではないかと推察される。

また、検出した礎石には墨書でその位置を示す漢数字や墨線が残るものがあり、方形の柱座を削り込んでいるものもあった。複数の柱座を重複して削り込まれているものがあることから、礎石の転用が認められる。東石は古い建物のものが放置されたままと推定しうるものもあり、前身の主屋棟・座敷棟があつたと推察できる。

座敷棟玄関の東側に、布基礎に囲まれた状態で埋甕と埋鉢が検出された。

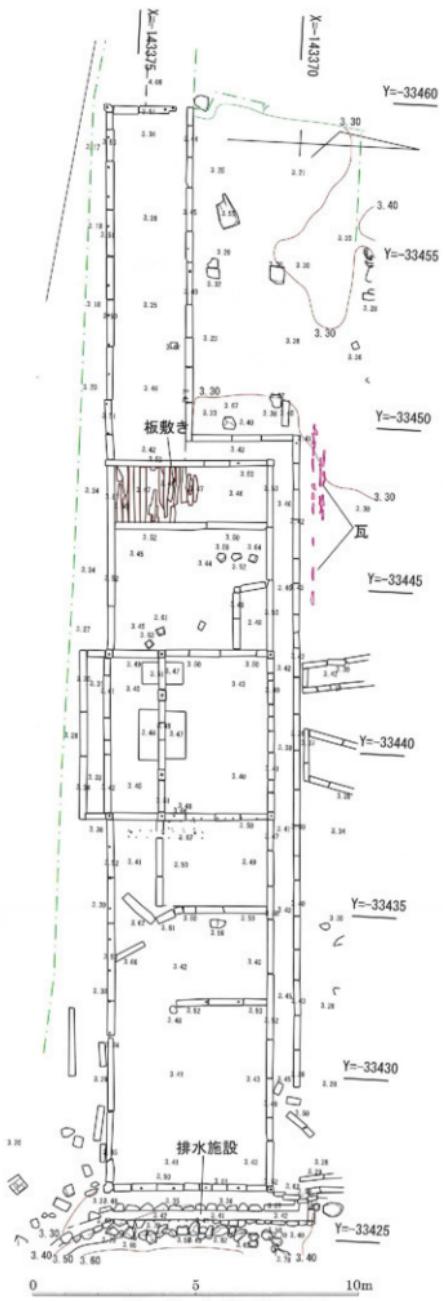
なお、主屋棟南西側において礎石を検出しておらず、絵図に描かれた付属の建物のものと推定される。

2. 長屋門

表長屋門

東西方向棟行約22.5m、南北方向梁間約5mの建物の西側に前面を揃えて、東西方向棟行約11m、南北方向梁間約2.5mの部屋を造る。また、東西約33.5mの長い建物のやや東寄りに扉構えの礎石等を確認した。扉構え東側は3部屋に区切られて、西側も前述の東西に細長い部屋を含めて3部屋に区切られているが、東石等は解体時に失われたようで、殆ど遺存していなかった。ただ、1部で床と思われる板を並べた構造が遺存していた。

この長屋門は伝わる話によると、昭和9年9月の室戸台風後再建されたもので、現在残る基礎はその時ものであるが、それ以前の長屋門の構造としては、東端の南北方向の雨落ち溝が花崗岩を並べたものであり、再建時その



第7図 表長屋門平面図

まま利用したものと思われる。また、長屋門北辺の門構え西側部分で雨落ちと思われる平瓦を並べた幅20cm程の溝を確認している。また、「大正7年写し絵図」に見られる居宅部分についても礎石が遺存することを確認した。

裏長屋門

東西方向棟行約12m、南北方向梁間約4mの建物である。東西の中央に2間幅の扉構えを、その両側に同じく2間四方の部屋を検出した。2つの部屋は南側、屋敷地側に入口を持つ。部屋の東石は、解体に伴い元位置を移動したものがあるが、比較的遺存状況は良好であった。

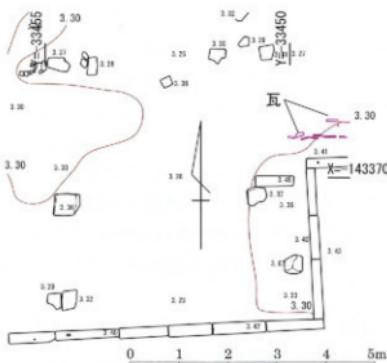
この長屋門の記録等は今のところ確認されてい

ないため、いつ頃のものか仔細は不明である。長屋門北面東側には、この門に繋がる高塀の石積みが遺存しており、これを避けて長屋門北面西側で下層確認を実施したところ、布基礎の石の下に、礎石や壁上と思われる粘土塊を確認した。また、扉構え東側の部屋の北面布基礎の石の下にも、礎石の遺存が認められ、下層遺構として、裏長屋門の前身建物が遺存しているのではないかと推定される。

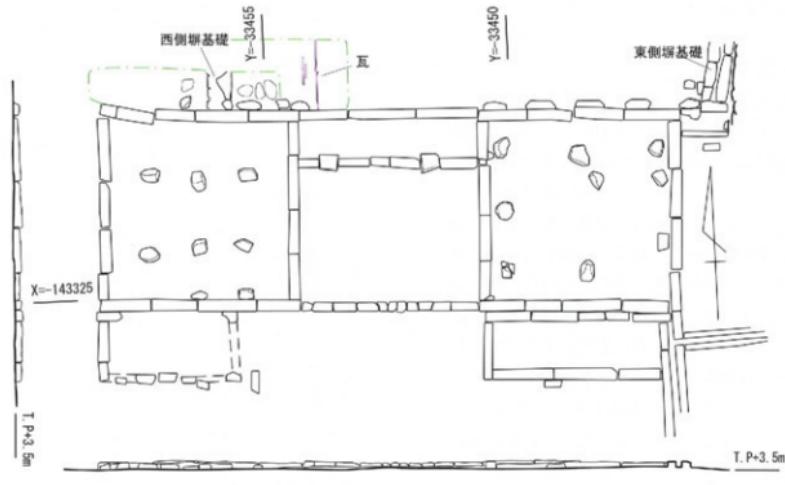
3. 蔵

土蔵①(屋敷蔵)

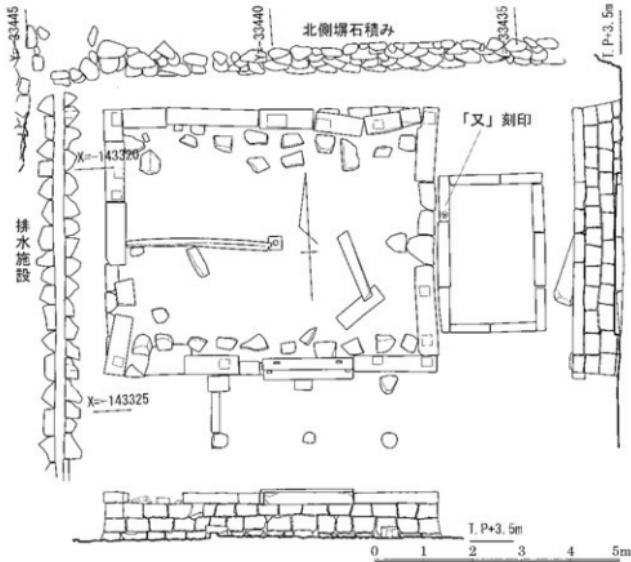
主屋・座敷棟の北、裏長屋門の東に位置する東西方向棟行約6.8m、南北方向梁間約5.5mの建物である。花崗岩切り石積み石垣の上に、入口部のみ花崗岩で他は凝灰岩の布基礎が比較的良好に遺存してい



第8図 表長屋門居宅部分平面図



第9図 裏長屋門平面図・立面図



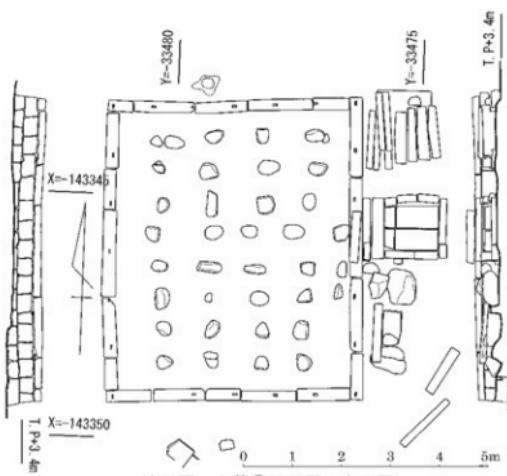
第10図 土蔵①平面図・立面図

た。布基礎の内側は、1部の東石と東石の上に直に置かれた根太が1本のみ遺存しており、解体時に破損したものと思われる。蔵入口の前には0.5間×2間分の礎石が6箇所遺存している。

この解体時に棟札^(註15)が発見されたり、その記載から、前身建物は享保10年(1725年)のもので、明治26年(1893年)に再建されたことが確認できた。

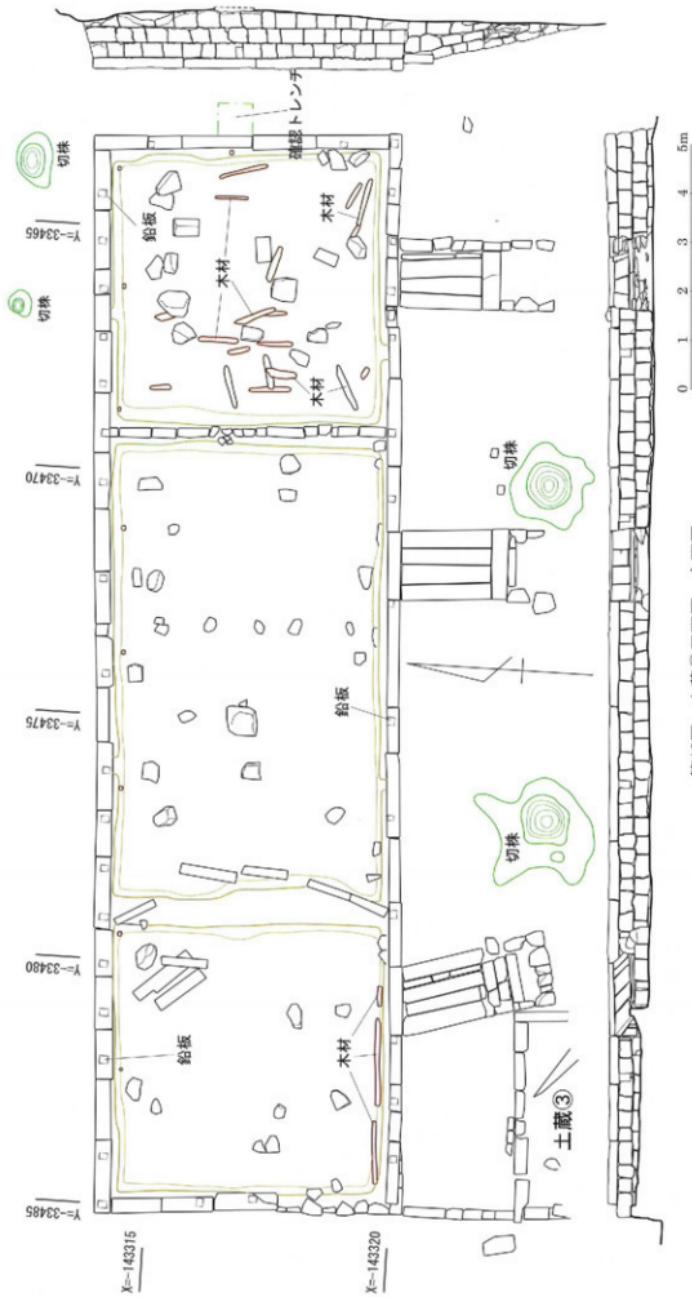
土蔵②(米蔵)

屋敷西北隅に位置する東西方向棟行約22m、南北方向梁間約6mの東西に長い建物である。平成16年の不審火により、解体時は屋根が焼け落ちて壁だけの状態で、また周囲には瓦や東石、焼けた板材が散乱する状況であった。解体時の影響も懸念されたが、花崗岩切り石積み石垣の上に、凝灰岩の布基礎が比較的良好に遺存していた。布基礎には方形の柱



第11図 土蔵④平面図・立面図

第12図 土蔵②平面図・立面図



座が削り込まれており、柱座とほぼ同じ寸法の鉛板が置かれていた。鉛板は柱を柱座に立てる際に、柱を安定させるために敷いたものであろう。内部は東から約6m、約10m、約6mの間隔で布基礎が遺存しており、3室に仕切られていた。各室には南面する出入り口が設けてあり、出入り口前面には角石を用いた斜路が造り付けられていた。また、西面の3段目以下の基礎石と土蔵③の2段目以下の基礎石は共通となっていた。

この蔵については、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石5段積み石垣の上の布基礎に凝灰岩と砂岩が混在することから、18世紀まで遡る前身建物があり、その基礎を再利用して土蔵が立てられていたと推察している。

以前から米蔵として「千石蔵」の名称で呼ばれており、北側の基礎はそのまま周濠に面しており、船を表長屋門まで入れて、そこから米を運び込んだものと推定される。

土蔵③(道具蔵)

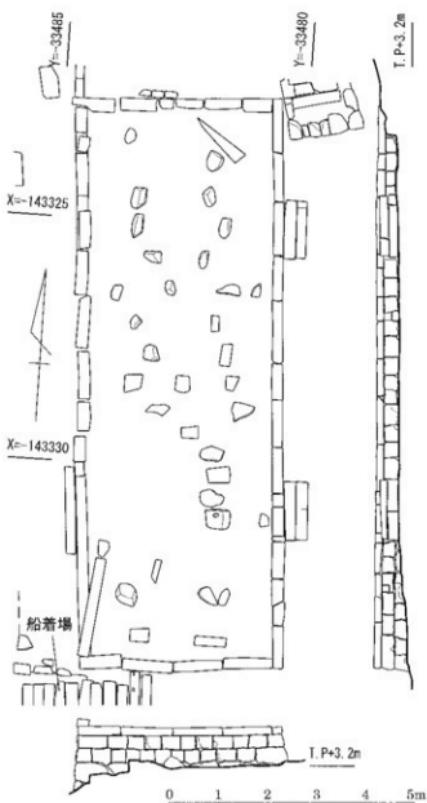
屋敷西北隅に銭屋川を背にして位置し、米蔵と直角に接する南北方向棟行約11.5m、東西方向梁間約4mの南北に長い建物である。花崗岩切り石積み石垣の上に、凝灰岩の布基礎が比較的良好に依存していた。内

部は米蔵のように室を仕切る布基礎は認められなかったが、南北棟行方向の中央で半間幅に3箇所の礎石が有り、壁で仕切られて南北2室の構造となっていた。各室には東西する半間幅の出入り口を設けており、出入り口前面に角石を用いた階段が造り付けられている。土蔵②の項で述べたように、西面の2段目以下の基礎石は、土蔵②と共に共通しており、元々は同時に建てられたのではないかと推定される。

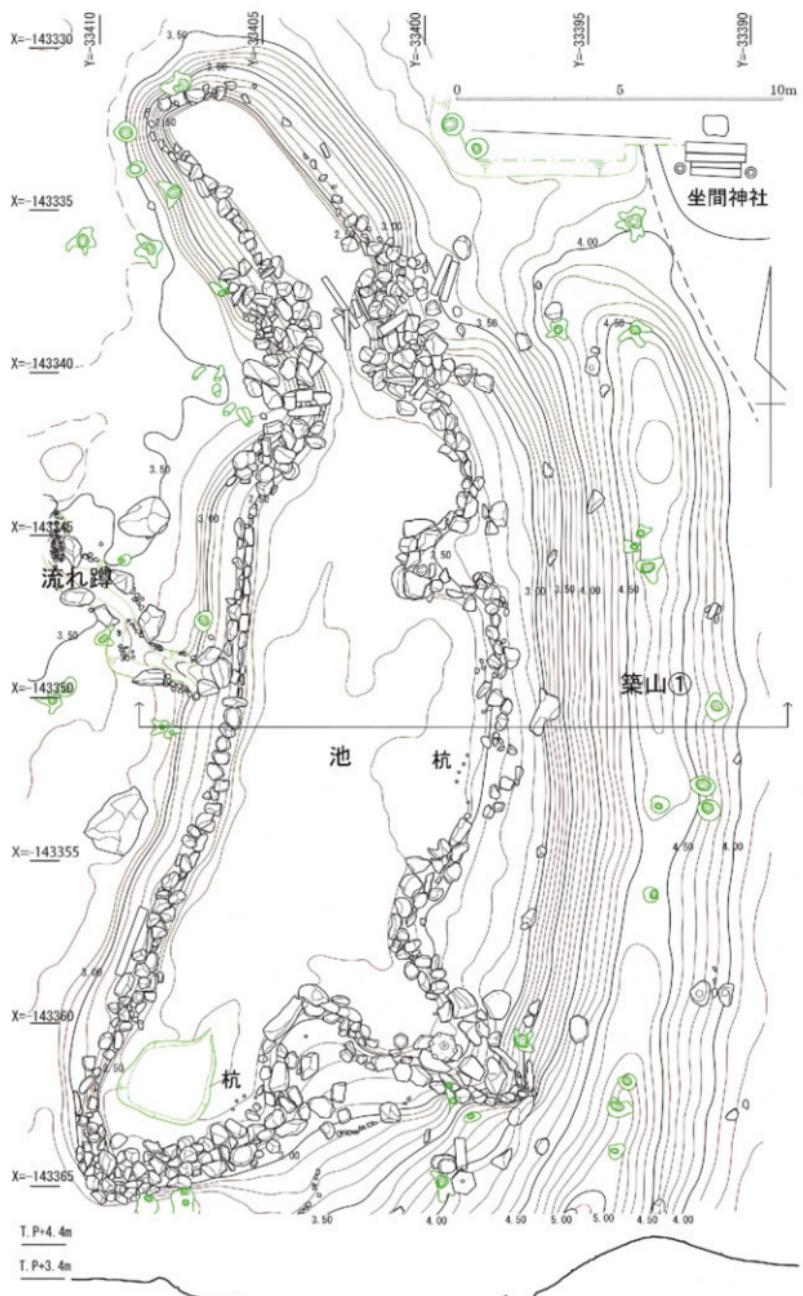
この蔵についても、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石積み石垣の上の布基礎に凝灰岩と砂岩が混在することから、18世紀まで遡る前身建物があり、その基礎を再利用して土蔵が立てられていたと推察している。なお、道具蔵の呼び名のとおり、解体時、北室には10数基の踏車が収納されていたが、解体時に外へ運び出されたものを教育委員会で回収し保管をしている。

土蔵④

屋敷西端中央部に銭屋川を背にして位置する。南北方向棟行6m、東西方向梁間約5mの建物である。「大正7年写し絵図」には見られるが、他の蔵と異なり建物解体時には既に上層建物は無く、基礎



第13図 土蔵③平面図・立面図



第14図 池～築山①平面図・断面図

は埋没し雑草で覆われ、その存在すら確認できない状況であった。花崗岩切り石積み石垣の上に花崗岩の布基礎が置かれ、布基礎内部は東石が比較的良好に依存していた。建物の東面中央やや北寄りには半間幅の出入口を設け、土蔵②と同様に出入り口前面に角石を用いた斜路が造り付けられていた。なお、東石の間から農具や工具等の鉄器が出土しており、この蔵の収蔵品と考えるならば、農工具類を収蔵するための「道具蔵」であった可能性がある。

この蔵についても、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石積み石垣の上の布基礎にも花崗岩を多用することから、他の建物と年代的に異なる可能性があるが、詳細は今のところ不明である。

4. 庭園

屋敷地の東側にある庭園には、南北方向に築かれた築山①と東西方向に築かれた築山②、そして瓢箪形を呈する池^(註10)が設けられ、座敷棟縁側から南東方向に池に向かって小石と岩で造作した流れが造られていた。池と築山の間には、人が通れる程度の空間があることから、池泉回遊式庭園であったことが推察される。

築山①

屋敷地東端、池の東側に幅6~8m、長さ約40m、高さ1.5~2mで、南北に細長く僅かに湾曲して築かれていた。築山には灯籠が配置してあったが、かなり以前から原位置から移動していたようである。

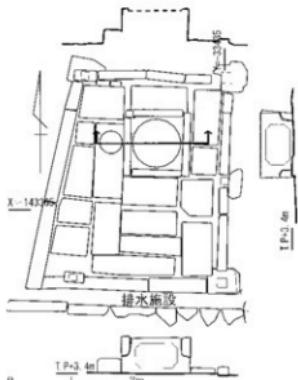
築山②

屋敷地南東隅に築山①に1~2m間を開けて直角に幅約8m、長さ約20m、高さ1.5~2mで、東西に築かれていた。築山には、石段が設けられ、灯籠も遺存していた。築山の北裾、表長屋門と境となる西裾を廻るように小石が並べられていた。

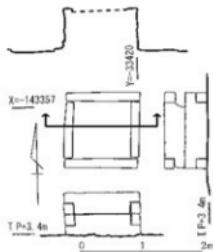
池

東西に細長く僅かに湾曲して築かれた築山①の西裾に沿うように幅2.5~8m、長さ約30m、深さ0.5~0.8mの池を掘削している。築山①の裾、池の東岸は単純でなく、入り組んだ状況を造っているのにに対し、座敷側の池西岸は単純に緩やかな円弧を呈しており対照的である。池の周囲は径30~50cmの石を1から数段で並べている。池の北側で幅2m程に狭くなったところには、絵図によると石橋が架けられていた痕跡が残るが、石材の1部は、既に失われているようである。橋の基礎にあたる部分は1部崩壊しているが、池の縁石と同様のやや大きめの礫を用いて「崩れ石積み」の技法で造られており、比較的良好に遺存していた。また、この「崩れ石積み」技法は、池の南端部にも用いられていた。

今回の調査では確認できなかったが、池西岸の石積みを観察すると、下部にもまだ石積みが存在し、複数回の改修が加えられていることが推定される。



第15図 井戸①平面図・立面図・断面図



第16図 井戸②
平面図・立面図・断面図

流れ(流れ蹲)

座敷の北東隅から池の西岸中央部に向けて岩を配し、拳大の礫を敷いた延長20m程の「流れ」を検出している。この流れの座敷側北東隅に岩で囲まれた部分があり、床面は三和土と礫で造作がなされており、ここに何かを据えていた痕跡が認められることから、蹲の様なものが置かれていたのではないかと推定される。また、座敷棟屋根からの雨水を池へ排水する機能も兼ねていたものと考えられる。

5. 井戸

井戸①

表長屋門から屋敷内へ入ると、すぐ右手にある井戸で、解体前は覆屋が存在し、上部構造は花崗岩板石による井戸枠が組まれ、井戸枠周辺は花崗岩板石を敷いて、間知石と布石を使って排水施設を設けてあった。今回は下部構造まで調査を実施していないが、解体前の観察では井戸枠の下は、井戸瓦を4～5段用いて井筒を造り、さらにその下には木材の枠組を確認している。屋敷内へは上水道が敷かれておらず、これが実用の井戸である。解体時は冬のため、水位が低かった。

井戸②

座敷棟、流れ蹲、池、築山②に囲まれた空間のちょうど中央部に設けられている。井戸枠は上部が花崗岩であったが、下部は凝灰岩が使用されていることから、実用のものではなく庭園に設けられた飾りの井戸と考えられる。

6. 堀

濠等で屋敷地を画しており、濠の内側に高堀等を築いていたと考えられるため、その有無の確認を行ったが、調査箇所を確保できたのが西側の錢屋川部分と北側の石垣の一部が残る範囲及び裏長屋門付近だけであり、東・南側では実施できなかった。

北側石積みは、上部に平坦面を持ち、かつて、ここに堀が築かれていたことが推定されるが、かなり早い段階で無くなってしまっており、解体直前まで、トタン波板により柵がされていた。北側石積みはそのまま周濠の南肩に続いている構造となっており、濠の最深部との比高差は、実際の高低差よりも大きく感ぜられる。

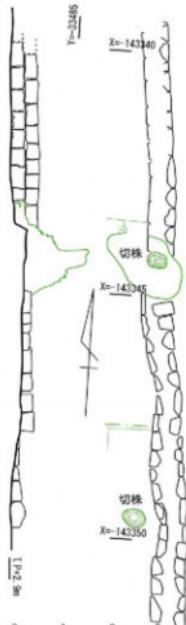
西側の錢屋川に面する部分は、先ず石垣を川に面して築き、幅1m程度の犬走りを設け、花崗岩間知石を積んで上面に幅60cmの平坦面をもつ高堀基礎を検出した。

裏長屋門付近でも門屋東隅から延びる花崗岩間知石を積んだ同様の高堀基礎を検出した。また、下層遺構と思われる類似の高堀基礎も検出している。石垣が残る部分の上面については、60～80cmの平坦面を持つことも確認出来た。

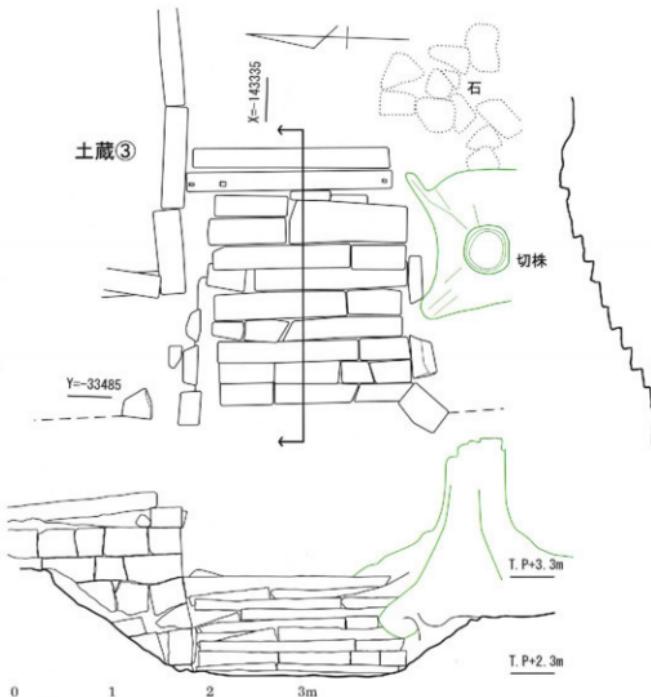
7. 船着場と周濠

船着場

土蔵③(道具蔵)の南西隅に接して設けられていることが「大正7年写し絵図」等から知られていたが、錢屋川の護岸工事で既に消失したものと考えられていた。調査の結果、角石を用いて幅約2m程の階段が検出され、良好に遺存していることが確認できた。石段は10段まで確認することができ、護岸を挟んで、更に錢屋川側にも遺存している可能性がある。階段最上段の東に接して門柱に使用した礎石が残っていたが、解体前に土蔵③に接して出入り口となる門があったことを確認している。



第17図 西側堀基礎
平面図・立面図



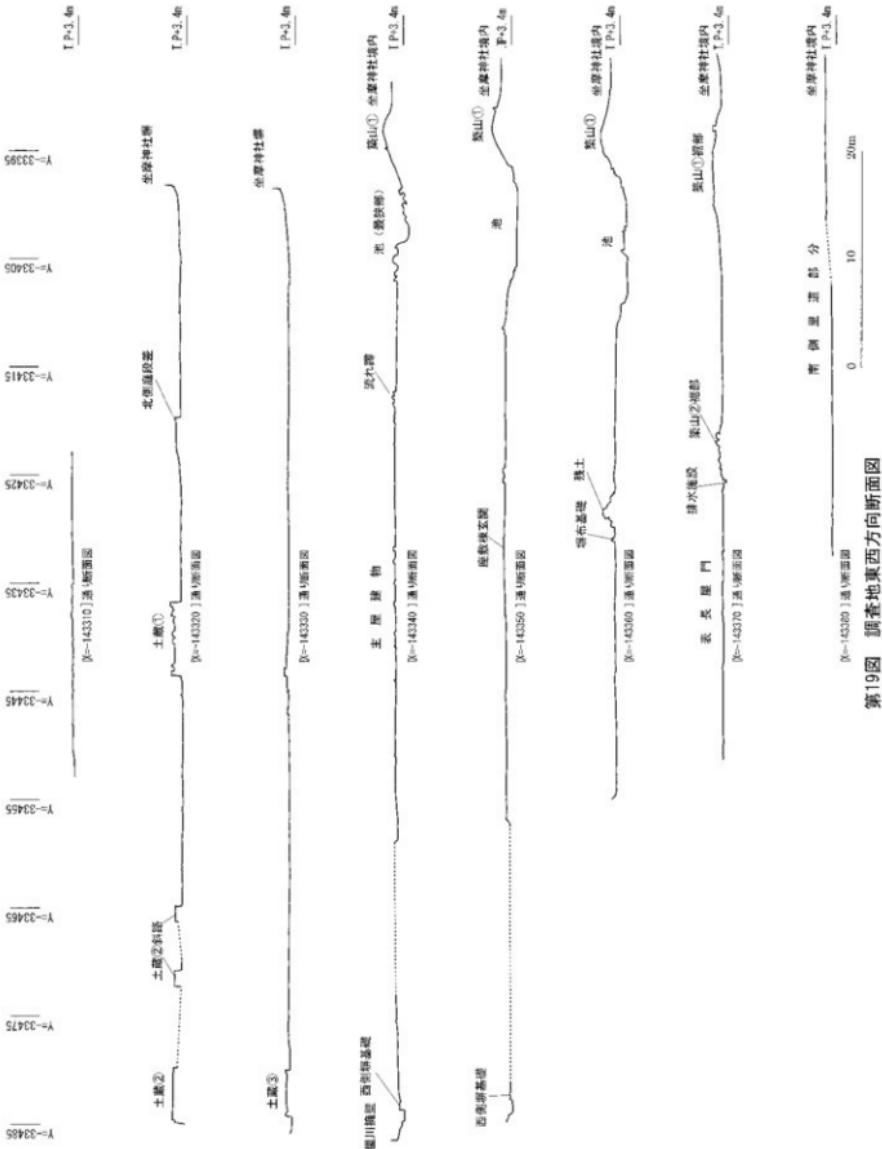
第18図 船着場平面図・立面図・断面図

周濠

「大正7年写し絵図」によると、会所屋敷の西側は銭屋川に接しており、残る3方には濠を廻らしていたことが描かれている。北(トレンチNo1)、東(トレンチNo3)及び南(トレンチNo2)に各1箇所トレーニチを設定して掘削を行った。その結果、何れの箇所でも現地表下に周濠が遺存していることを確認できた。幅は1.8m程度と推定され、板と杭による護岸が施されていることが、北(トレンチNo1)と南(トレンチNo2)の周濠で確認できた。表長屋門より西側は暗渠となっていたと考えられている。長時間掘った状態で作業できないため、今回は有無の確認に止めざるをえなかった。

舟入

ちょうど土蔵②の北側から裏長屋門北側までの間で、現況で東西方向の北側周濠がやや北に角度を変えて銭屋川に繋がっているところが認められる。大半が今回の調査対象地外になるため、発掘して確認することは出来なかつたが、銭屋川までの延長25m程が幅もやや拡がっており、銭屋川と直角ではなくやや鈍角に繋がるのは下流からの船を引き込むためではないかと考え、ここに船入が設けられていたと推測している。

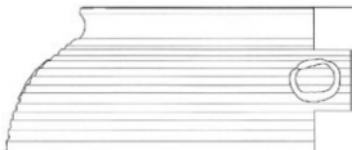




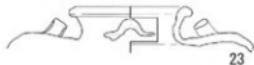
第20図 国産磁器実測図 ($S=1/4$)



21



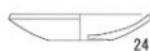
22



23



30



25



26



27



28



31



33



元
浦野商店
發
大阪市東区伏見町
賣
藥品
問屋

34

商標
劇物
二硫化炭素
入サセキ
登録
薬業用外

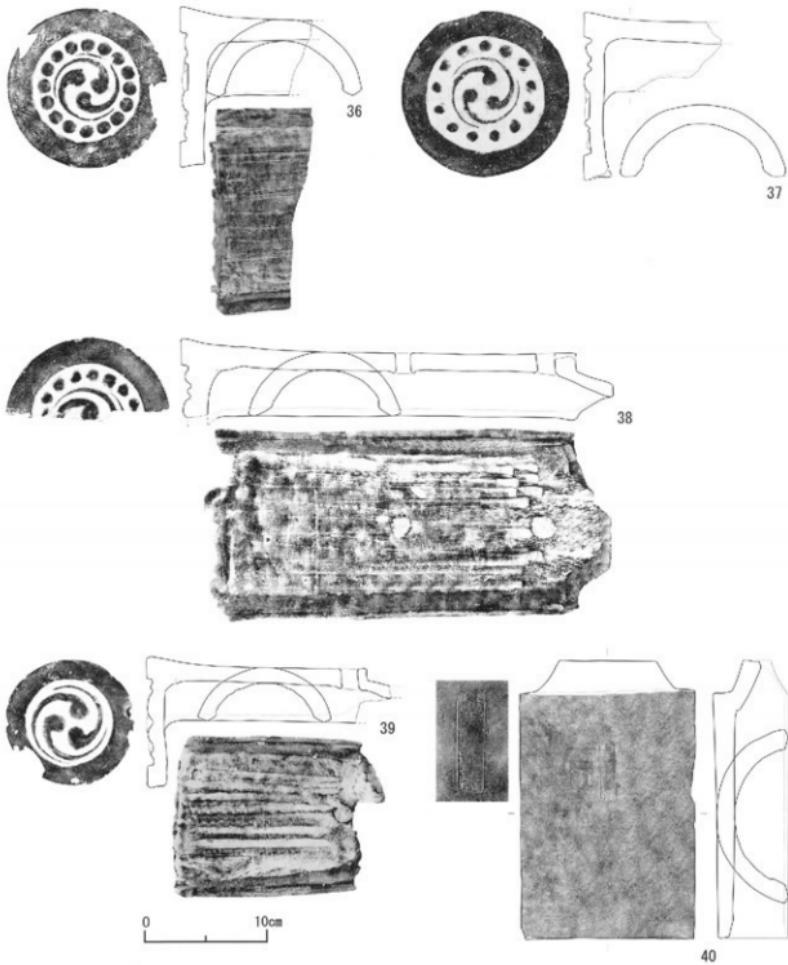
大阪府下西成郡今宮町
浦野製薬会社工場

0 10cm



35

第21図 国産陶器 (S=1/4, S=1/3)・土製品 (S=1/2)・ガラス (S=1/2, S=1/3) 実測図



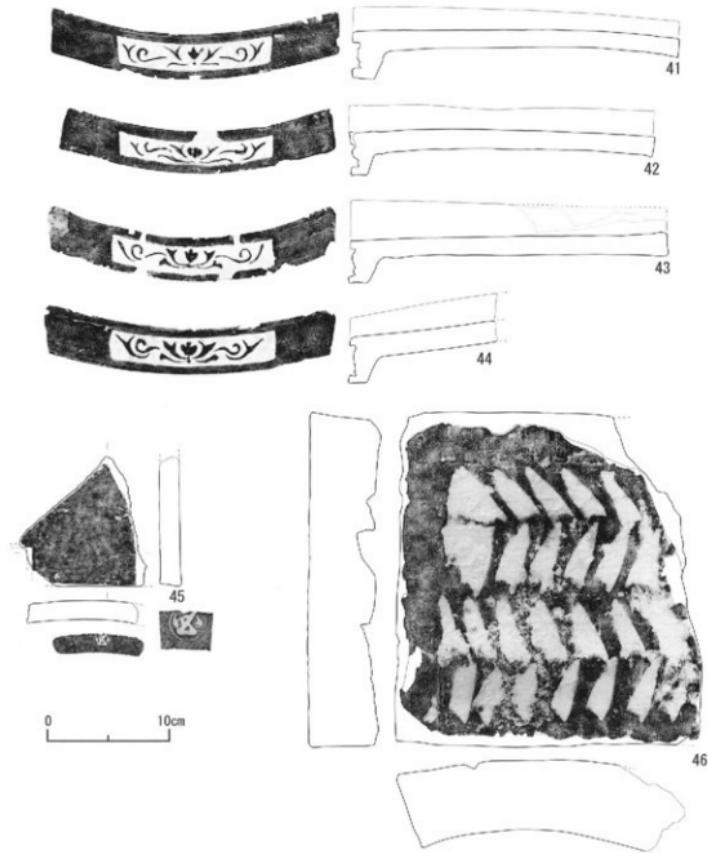
第22図 軒丸瓦・丸瓦実測図 ($S=1/4$)

第2節 遺物

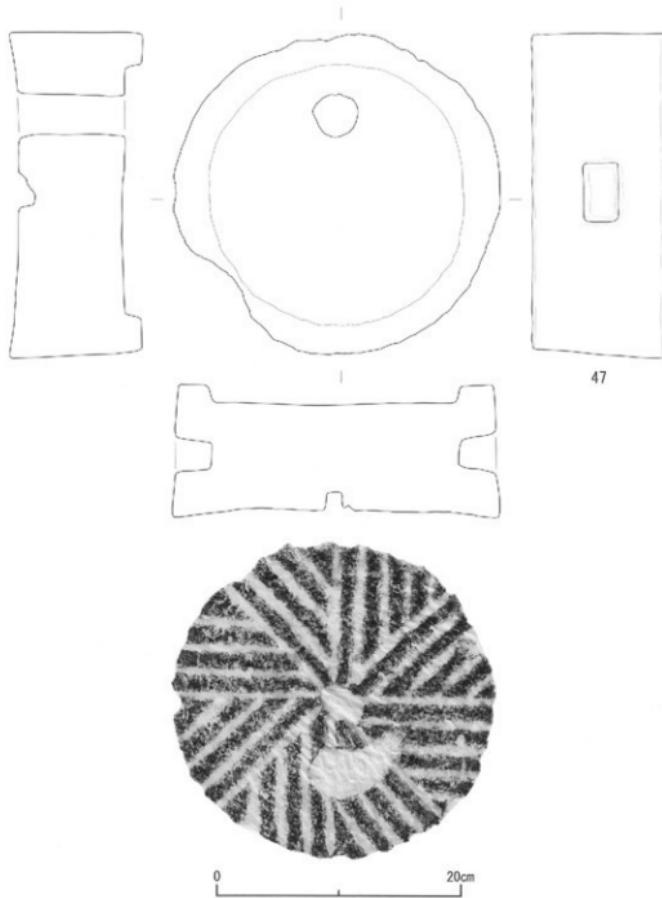
今回の調査では、表土を掘削するに留まったため、遺物には建物解体時に散乱したものや表面採集といつてもよいものも含まれている。時期的には20世紀前半の新しいものもあるが、近代以降の会所の歴史を示す資料として取り上げており、陶磁器類、瓦、金属製品、木製品に分類して図化した。

陶磁器類は国産のものに限られており、染付は時期的には18世紀代から20世紀初頭頃のものが殆どで、17世紀代まで遡るものは無かった。

瓦については、瓦当面の文様の代表的なものを選んで図化している。各建物が棟瓦に葺き替えられる前に使用されていた本瓦である。



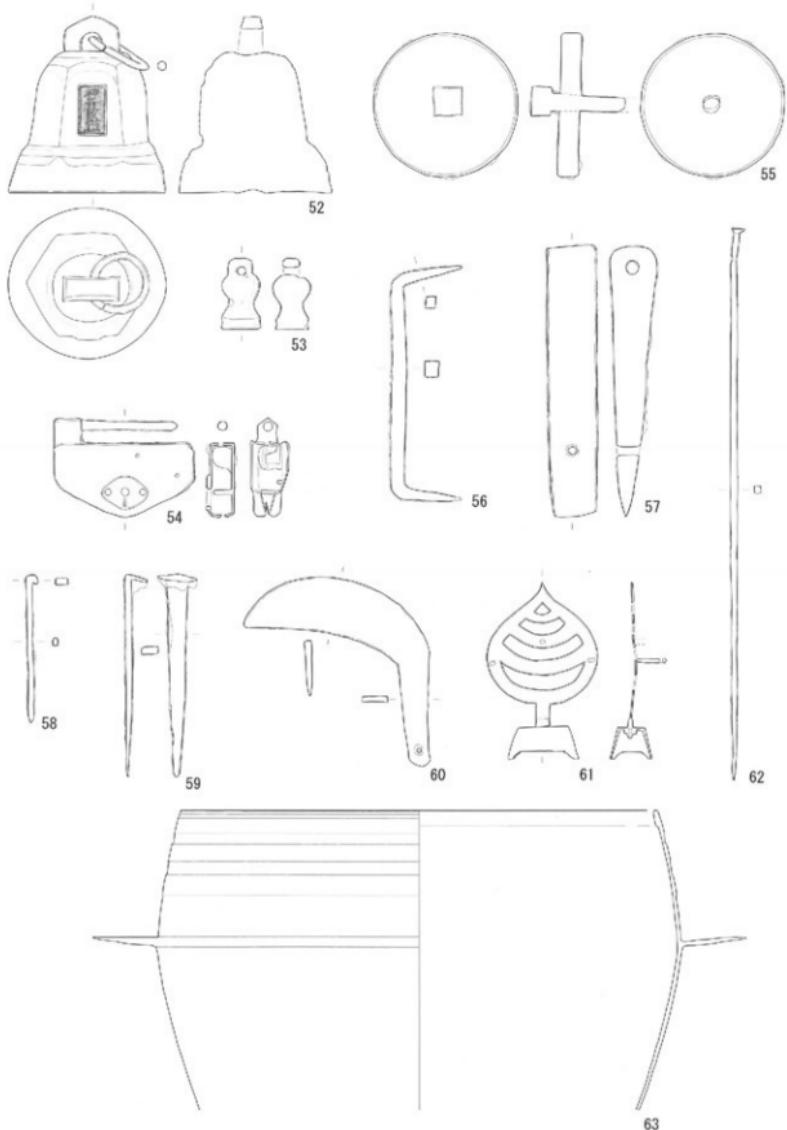
第23図 軒平瓦・平瓦・井戸瓦実測図 ($S=1/4$)



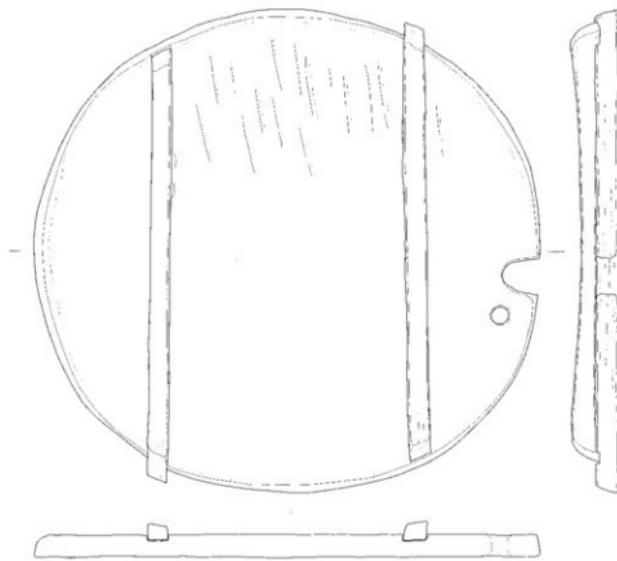
第24図 石製品実測図 ($S=1/4$)



第25図 錢貨拓影 ($S=1/1$)



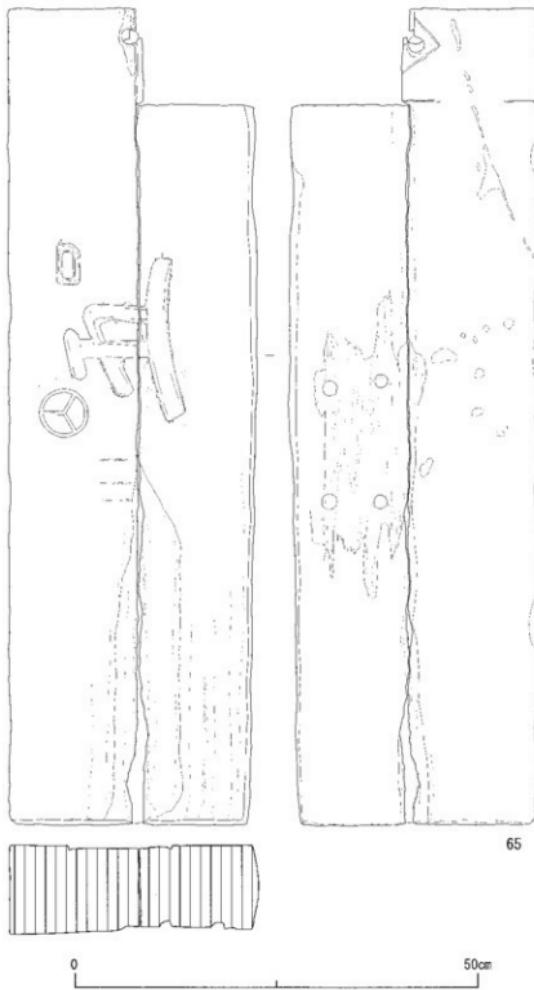
第26図 金属製品実測図 ($S=1/4$)



64



第27図 木製品実測(1) (S=1/6)



第28図 木製品実測図(2) ($S=1/6$)

表1 遺物觀察表

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
1	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(10.4) 底径:4.1 器高:4.7	高台はやや「ハ」の字 状にひらく。体部は 丸みをもつつ口縁 部へ伸びる。口縁部 はやや尖り気味。	内:施釉、露胎 (底部) 外:施釉、露胎 (高台底部)	密	N8/灰白色	口縁へ体部15%、底部完形 外面に折れ模様の染付 くらわんか窓 18世紀中頃～末の所産
2	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(10.0) 底径:(2.6)	口縁部は外上方へ伸 びる。	内・外:施釉	密	5Y8/1灰白色	口縁部30% 外面に傾目文の染付 18世紀前半の所産
3	十歳(3) (南室)	国産磁器	染付碗	口径:(11.5) 底径:(5.0) 器高:4.9	高台はやや高い。薄 邊部は面をもつ。体部 は丸みをもつつ外 上方へ伸び、口縁部へ続く。 邊部は丸く 縮める。	内・外:施釉	密	5Y8/1灰白色	40% 外面に染付 窓反窓 19世紀後半の所産
4	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(9.6) 器高:(4.3)	口縁部はわずかに外 上方へ伸びる。	内・外:施釉	密	5Y8/1灰白色	口縁部20% 外面に草木文(または竹か)の染付 広東窓か 18世紀末～19世紀初頭の所産
5	庭園北 (池周辺)	国産磁器	白磁乳鉢	口径:11.5 底径:5.7 器高:5.6	底部は中央がやや突 む。体部は外上方へ 伸び、口縁部へ続く。 口縁部は面をもつ。 片口鉢である。	内:施釉(口縁 部)、回転ナデ 外:施釉(口縁へ て体部、ナデ(底 部))	密	2.5Y8/1 ～8/2灰白色	完形 底部外面に墨書き有り。「鉢」か 19世紀末～20世紀初頭の所産
6	裏長屋門	国産磁器	染付鉢	口径:(18.6) 器高:(4.5)	体部は丸みをもつ。 口縁部は「く」の字状 に外反し、端部はや や尖り気味に縮む。	内・外:施釉	密	N8/灰白色	口縁へ体部20% 内面に口縁部に波瀾文の染付 18世紀代の所産
7	裏長屋門	国産磁器	染付鉢	口径:(10.6) 底径:(4.5) 器高:5.0	高台はやや高い。 薄邊部は面をもつ。 体部は外上方へ伸び、 口縁部へ続く。口縁部 は直角形で縮む。 端部は丸く縮める。	内:施釉 外:施釉、露胎 (高台底部)	密	5Y8/1灰白色	口縁へ体部40% 口縁部が五筋形 内面に山水文の染付 外面に墨書きの染付 18世紀末の所産
8	裏長屋門	国産磁器	染付碗	底径:(3.4) 器高:(2.4)	高台はやや「ハ」の 字状にひらく。体部は 丸みをもつつ口縁 部へ伸びる。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	高台10% 見込に墨書きの染付 外面に草花文の染付 19世紀後半の所産
9	主屋建物西廊	国産磁器	盃	口径:(5.6) 底径:2.2 器高:2.7	高台部は尖り気味 である。体部は丸 みをもつ口縁部へ伸び る。邊部は丸く縮める。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	口縁部20%～底部完形 見込に「乾」の款 外縁に草花文の染付 19世紀末～20世紀初頭の所産
10	主屋建物	国産磁器	染付鉢	口径:(21.8) 器高:(9.9)	体部は外上方へ伸 び、口縁部はややか な形で外反する。邊部は 丸みをもつ。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	20% 外面に山水文の染付 19世紀代の所産
11	土蔵①	国産磁器	染付鉢	口径:18.9 底径:9.9 器高:6.5	高台周部は面をも つ。体部は丸みをも つつつ外上方へ伸 び、口縁部は直立す る。端部は面をもつ。	内:施釉 外:施華、露胎 (高台底部)	密	10YR8/1 灰白色	完形 内面に花唐草文と、花弁の輪筋内に 山水文の染付 見込に鳳凰 豪放軸写 19世紀末の所産
12	土蔵①	国産磁器	染付盃	口径:9.2 底径:3.4 器高:2.7	高台周部はやや尖り 気味である。体部は 丸みをもつつ1口縁 部へ続く。端部は丸 みをもつ。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	完形 見込に花文の染付 外面にみじか草唐 花外反窓 19世紀末の所産
13	土蔵①	国産磁器	染付盃	口径:9.6 底径:3.6 器高:3.0	高台周部は丸く縮め る。体部は丸みをも つつつ1口縁部へ続く。 口縁部は六角形を呈 する。端部はやや外 反し丸みをもつ。	内:施釉 外:施華、露胎 (高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	完形 見込に花文の染付 外面に草花文の染付 高台に「重力形格内に寿」の款 豪放軸写 19世紀後半の所産
14	裏長屋門	国産磁器	染付湯呑	口径:(8.0) 底径:5.5 器高:6.5	高台周部は丸く縮め る。体部は直立気味 に伸び、口縁部へ続く。 端部はやや平ら である。	内・外:施釉	密	5Y8/1灰白色	40% 見込に五瓣花文 高台に「重力形格内に解説不能の落 18世紀後半の所産
15	裏長屋門	国産磁器	六角小皿	口径:7.4～9.9 底径:3.3～5.2 器高:1.8	高台周部は平らであ る。口縁部は外反 し、口縁部は面をも つ。口縁、高台部 は六角形を呈する。	内:施釉 外:施釉、露胎 (高台底部)	密	深緑(軸)	完形 内面に绘 三田青花 19世紀代の所産

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
16	表長屋門	国産磁器	染付蓋	口径:(10.0) 底径:(3.5) 器高:28	高台腹部は丸く筋める。体部は丸みをもちつつ口縁部へ傾く。端部はやや平らである。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	40% 内面に本の葉の染付 内面中央に抽象化した文字の染付から草本文(ひがし)の染付 広葉瓶 19世紀前半の所産
17	土蔵② (中室)	国産磁器	染付丸皿	口径:(12.8 底径:(5.0) 器高:36	高台は直立する。体部は外上万へ伸びる。口縁部は丸みをもつ。	内:施釉、露胎(底部の一部) 外:施釉、露胎(高台底部)	密	5Y8/1 灰白色	60% 内面に草本文の染付 見込に五瓣花文のコンニャク印判 内面は輪轉技法により瓶の目状を望する 18世紀後半の所産
18	主屋建物西廻	国産磁器	染付瓶	底径:8.8 器高:(26)	高台肩部は面をもつ。体部は丸みをもちつ伸びる。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	底部完形 内面に赤絵山水画の染付 高台に「富貴昌泰」の鉢 鉢の四面四角高台 伊万里焼 19世紀前半の所産
19	主屋建物	国産磁器	染付瓶	口径:(19.8) 底径:(12.0) 器高:37	高台肩部は丸みをもつ。体部は外上方へ伸び、口縁部はやや直立気味である。端部は丸みをもつ。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	5Y8/1 灰白色	口径～底部50% 口径の形態は輪轉 内面にみどり葉文と小花の染付 見込に松竹梅川派文の染付から 外面上に連続済草花の染付 高台に「太明成化年製」の鉢 肥前磁器 18世紀前半の所産
20	表長屋門 (居宅部分)	国産磁器	タイル	長:15.8 幅:15.9 厚:2.0	正方形。	内:露胎、ナデ、華奢(墨かにかかる) 外:施釉	密	10YR8/3 浅黄褐色	完形 内面に判読不能の墨書きあり(薄く残る) 外面上に草花文の染付 前田系か 19世紀末～20世紀初頭の所産
21	主屋建物	国産陶器	蓋	口径:6.0 最大径:8.1 つまみ径:1.8 器高:3.4	乳頭状のつまみをもつ笠形。	内:回転ナデ 外:施釉	密	10YR7/3 にい黄 橙色	ほぼ完形 外面上に茶褐色の釉で草花文を描く 19世紀代の所産
22	表長屋門	国産陶器	水瓶	口径:(38.0) 器高:(11.9)	体部は丸みをもちつつ口縁部へ傾く。口縁部はやや直立気味に伸びる。端部は内側し面をもつ。	内・外:回転ナデ 1mm前後の長石・ 漂母	内: 2.5Y4/2 灰赤色 外: 10R4/3 赤褐色	口径部 10%以下 脇窓燒 茶道具 耳環付(1箇所残)	口径部 10%以下 脇窓燒 茶道具 耳環付(1箇所残)
23	土蔵①	国産陶器	茶壺	口径:(8.8) 器高:(3.8)	肩:(1.5)。口縁部は玉締め。肩部を意識的でなくすませている。	内・外:回転ナデ	1～2mm の長石	7.5YR4/2 灰褐色	口径～肩部 30% 物が所々に残る 四耳瓶(耳1箇所残) 信楽焼
24	庭園北 (池周辺)	国産陶器	灯明皿	口径:(11.4) 底径:5.0 器高:2.1	底部は中央がやや窪む。体部は外上方へ伸び、口縁部へ傾く。口縁部は面をもつ。	内:施釉 外:回転ナデ	密	2.5Y6/1 黄灰色 雅・淡綠 黄色	15% 内面に施釉 信楽焼 19世紀代の所産
25	主屋建物北庭 (石碑付近)	土御曾土器	椀	底径:3.8 器高:(2.8)	高台肩部は面をもつ。体部は丸みをもちつつ外上方へ伸びる。	内・外:ナデ	1mm以下 の長石	7.5YR7/4 にい黄 橙色	底部完形 白色骨材を全面に使用 焼成や火候質 外表面が全体に剥離する
26	土蔵④	土御曾土器	碗?	口径:22.0 底径:22.6 器高:1.2	底部は平らである。口縁部は丸みをもつ。	内:施釉 外:ナデ	1mm前後の長石	10YR7/4 にい黄 橙色 華奢	40% 内面に緑釉を施す
27	土蔵④	土御曾土器	灯明皿	口径:(5.6) 底径:(4.4) 器高:0.9	平底から口縁部は傾く外上方へ伸びる。端部は面をもつ。	内:回転ナデ、 麻葉 外:回転ナデ、 糸切り模(底部)	密	7.5YR8/4 浅黄褐色	30% 内面に輪轉を施す 19世紀代の所産
28	-	瓦質土器	箱	口径:(34.1) 器高:(8.8)	体部は外上方へ伸びる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く納める。	内:ナデ 外:ユビナデ	1mm以下 の長石	N4/ 灰色	口径部 10%以下 口縁部内面に把手?の痕跡有り
29	主屋建物	漆器	酒器?	口径:6.4 器高:(3.6)	体部は丸みをもつ。口縁部はやや尖り氣味に納める。	内・外:漆	-	5YR7.1/1 黒色	60%
30	-	国産陶器	通い便利	口径:3.6 底径:9.4 器高:25.0	底部は中央が窪む。体部は外上方へ伸び、頸部で内上方へ伸びる。口縁部は直立する。口縁部は外側へ肥厚する。	内・外:回転ナデ	1mm前後の長石	7.5YR3/3 暗褐色	口縁・底盤完形。体部 80% 白釉で「小松版」を描く 信楽焼 19世紀末～20世紀初頭の所産

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
31	土蔵① (西側排水溝)	国産陶器	茶入れ	口径:(3.0) 底径:3.3 高さ:5.2	底部は中央がやや突む。体部は上方に伸び、肩部で内上方へ伸びる。口縁部は切欠く直立する。口縁部はわずかに外反する。	内:回転ナデ 外:施釉、回転ナデ、余切り削(底部)	黒	2.5YR7/2 灰黄色 釉:淡緑 灰色	70% 刻印(文字不詳)あり 茶道具 耳付き(1箇所残)
32	土蔵①	土製品	塔	器高:(3.1) 厚:1.1～1.8	底面には円形の穿孔がみられるが、貫通ではない。	ナデ	1mm以下の長石・ 石英・ 雲母	7.5YR7/4 にぶい橙 色	70%(三重まで埋根が残る)
33	土蔵④	ガラス	小型瓶	口径:1.1 底径:1.3 器高:5.5	方形を呈する。口縁部は水平でない。	—	—	濃緑色	完形 表裏 体部二面に文字有り〔横山製業〕、 〔イボコロリ〕
34	主屋建物西庭	ガラス	瓶	口径:2.1 底径:5.7 器高:19.1	円形を呈する。口縁部は凸台状にふくらむ。底部は高台から平面を呈する。	—	—	淡青緑色	瓶 体部に文字有り「大阪府下西成郡今宮町、油野製業今宮工場、早錆酒標、?家用外、二硫化炭素、薬物、百廿九人、賃資元、大阪市東区伏見町、製品同屋油野商店」
35	土蔵④	ガラス	瓶	口径:2.3 底径:5.0 器高:19.5	円形を呈する。口縁部は凸台状にふくらむ。底部は高台からやや凸状を呈する。	—	—	淡青緑色	ソース瓶 体部に文字有り「REGISTERED、 TRADE ★(星マーク) MARK、 STAR BRAND SAUCE L.S.&SON」
36	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:132 長:(10.9) 厚:2.0	瓦当は左巴文の四開間を16個の珠紋が巡る。	四:ナデ、布目 左:施釉 凸:ミガキ	1mm前後の長石・ 雲母	N5/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
37	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:13.7 長:(11.3) 厚:1.7	瓦当は左巴文の四開間を13箇の珠紋が巡る。	四:ナデ、スピ ナデ 凸:ナデ	1mm前後の長石・ 雲母	N5/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
38	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:(13.8) 長:35.4 厚:1.5	瓦当は左巴文の四開間を15箇(復元)の珠紋が巡る。丸瓦部に斜孔2箇所有り。瓦縫式である。	四:ナデ、スピ ナデ 凸:ミガキ	1mm前後の長石・ 雲母	N4/～3/ 灰～暗灰色 色	瓦当面40%、丸瓦部完形 18世紀以降の所産
39	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:10.4 長:20.0 厚:1.2	瓦当は左巴文。丸瓦部に斜孔1箇所有り。瓦縫式である。	四:ナデ、布目 左:施釉のちへラ状工具によるナデ 凸:ミガキ	1mm前後の長石・ 雲母	N4/～5/ 灰色	90% 18世紀以降の所産
40	土蔵③ (南室)	瓦	丸瓦	長:22.7 伏羅幅:8.0 底羅幅:14.2 厚:1.5	玉縫式である。	四:棒状工具によるナデ 凸:ナデ	1mm以下 の長石・ 雲母	N3/暗灰色 色	はげ完形 凸面に刻印あり「翁文と、『株主山吹?』大太郎 ■■■■社」(■は文字不詳) 19世紀以降の所産
41	土蔵④	瓦	唐草文軒 平瓦	長:27.8 瓦当面幅:23.9 伏羅幅:22.9 厚:1.4～4.0	瓦当面はいわゆる横唐草文である。渠窓の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。額部は段階式である。	四、凸:ナデ	1mm以下 の長石・ 雲母	N5/～4/ 灰色	完形 18世紀以降の所産
42	土蔵④	瓦	唐草文軒 平瓦	長:25.1 瓦当面幅:22.3 伏羅幅:21.4 厚:1.5～3.5	瓦当面はいわゆる横唐草文である。渠窓の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。額部は段階式である。	四、凸:ナデ	1mm以下 の長石・ 雲母	N5/～4/ 灰色	完形 18世紀以降の所産
43	土蔵② (中室)	瓦	唐草文軒 平瓦	長:26.2 瓦当面幅:23.0 伏羅幅:19.8 厚:1.5～3.5	瓦当面はいわゆる横唐草文である。渠窓の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。額部は段階式である。	四、凸:ナデ	1mm前後の長石・ 雲母	N5/～4/ 灰色	90% 18世紀以降の所産
44	土蔵③ (南室)	瓦	唐草文軒 平瓦	長:(12.2) 瓦当面幅:23.9 厚:1.8～3.9	瓦当面はいわゆる横唐草文である。渠窓の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。額部は段階式である。	四:ナデ 凸:スピオサエ	1mm以下 の長石・ 雲母	N5/～4/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
45	表長屋門	瓦	平瓦	長:(10.6) 幅:(9.7) 厚:1.5～1.7	—	四、凸:ナデ	1mm以下 の長石・ 雲母	N5/～4/ 灰色	破片 端面に刻印あり(直径1.5cmの内に「8」に似た文様)
46	—	瓦	井戸瓦	長:27.5 幅:(25.6) 厚:3.9～6.0	凸面に三角形の刻印を4列施す。	内:ナデ 外:ナデ、刻印	1mm前後の長石・ 雲母	N3/暗灰色 色	一輪足欠損
47	表長屋門	土製品	石臼	径:26.8 高さ:10.9	真剣の振り目は6条・5分割。傾面にかくびが2箇所みられる。	—	—	—	完形 上臼

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
48	主屋建物	銅錢	五銖硬貨	径:1.9 円孔径:0.4 重:2.58(g)	-	-	-	-	「五銖」/「大日本 大正十年」
49	主屋建物	銅錢	中田硬貨	径:2.8 重:6.38(g)	-	-	-	-	「THE REPUBLIC OF CHINA TEN CASH」/「中■(帶)民國當十■元」(■は文字不明)
50	主屋建物	銅錢	寛永通宝	径:2.4 方孔:0.65(互) 重:3.18(g)	-	-	-	-	「寛永通寶」
51	土蔵①	銅錢	一錢硬貨	径:2.3 重:3.54(g)	-	-	-	-	「一錢」/「大日本 大正八年」
52	主屋建物	金属製品	分銅	高:14.5 幅:12.9 重:5700.0(g)	鉄錐形。	-	-	-	完形 5700g:1.52貫 約1.5貫の分銅か 銀製品
53	土蔵①	金属製品	分銅	長:5.9 幅:3.2 厚:3.1 重:197.46(g)	瓢箪形。	-	-	-	完形 197.46g:52.66匁 約50匁の分銅か 銀製品
54	土蔵② (東室)	金属製品	鏡	長:8.2 幅:11.5 厚:0.2~0.4 重:320.38(g)	-	-	-	-	完形 銀製品
55	土蔵③ (中室)	金属製品	滑車	径:11.8 厚:1.8 重:1905.0(g)	円形。ボルトを棘とする。	-	-	-	ほぼ完形 銀製品か 銅製品
56	-	金属製品	鍔	長:19.4 幅:8.0 厚:0.3~1.4 重:2215.6(g)	両端が「L」字状に曲がる。前面は方形である。	-	-	-	ほぼ完形 銅製品
57	-	金属製品	扉部材	長:22.4 幅:4.2 厚:0.2~0.3 重:1510.0(g)	クサビ型。	-	-	-	完形 銅製品
58	-	金属製品	釘	長:12.1 幅:0.4~0.9 厚:0.6 重:16.85(g)	頭部は肥厚する。前面は方形である。	-	-	-	完形 銅製品
59	-	金属製品	釘	長:16.6 幅:0.4~3.2 厚:0.1~0.5 重:83.47(g)	頭部は「L」字状に曲がる。前面は長方形である。	-	-	-	完形 銅製品
60	裏長屋門	金銅製品	鎌	長:15.5 幅:15.3 厚:0.1~0.6 重:216.93(g)	-	-	-	-	完形 銅製品
61	土蔵④	金銅製品	飾金具	長:14.5 幅:9.1 厚:0.1~0.3 重:158.72(g)	火炎型。	-	-	-	完形 金銅製品
62	土蔵①	金属製品	火箸	長:50.3 幅:0.1~1.1 重:60.2(g)	頭部は肥厚する。前面は方形である。	-	-	-	完形 銅製品
63	主屋建物	金銅製品	鉄釜	L径:(39.0) 圓径:(50.0) 器高:(24.5) 重:1295.0(g)	体部は錐形を呈する。鋸はわずかに上方へ伸びる。口縁部は内面に肥厚する。	-	-	-	口縁~体部 20% 銅製品
64	-	木製品	蓋	径:60.0~63.0 厚:2.8~3.0	表側にははめ込み式の把手が2本ある。内外面ともに使用痕はみられない。	-	-	-	完形
65	-	木製品	扇門 落し板	長:116.0 幅:15.6 厚:9.9~11.0	表面には「五」「四」、「〇の中に入」の加工がみられ、文字内とその周囲、裏面にも墨が付着している。裏面には4箇所の円孔があるが、貫通はない。 一端には釘孔が貫通する。裏面には釘に付継した要形の金具痕がみられる。また、二次加工痕である薪痕がみられ、釘孔の端が切り取られている。	-	-	-	ほぼ完形

第5章　まとめ

今回の確認調査では、各建物の礎石を始め、庭園、船着場等の遺構が予想以上に良好な状態で遺存していることが確認され、以下のことを確認することができた。

- ①各建物の礎石の検出状況から、主屋棟、座敷棟、蔵等の建物、特に裏長屋門については下層に重複する礎石を検出しており、前身建物の基礎と考えられ、複数回の建て替え、改築が行われていることが推定される。
- ②各建物の礎石、特に主屋建物のそれには柱座を2～3回削り込んでいるものがあり、また、墨線や柱座の向きが最後の建物の軸線と一致しないものもあることから、複数回の建て替えの度に再利用され、その中には会所創建時のものが遺存している可能性が考えられる。
- ③今回の調査では解体直前には確認できなかった「大正7年写し絵図」に描かれている以下の建物配置及び関連遺構を確認することができた。

- ・表長屋門に付属していた居宅部分の礎石の検出
 - ・銭屋川に面した船着場の石段
 - ・上蔵④(道具蔵?)の基礎の検出
 - ・裏長屋門東側から伸びる高塀基礎の検出
 - ・池は縁石が明確に遺存しており、形状が判明
 - ・敷地を囲む周濠のうち現状では埋没していた東側周濠の確認
 - ・表長屋門正面西側にも濠があったことが確認
 - ・主屋棟西側に付属する建物の礎石の検出
- ④絵図には描かれていなかったもの。
- ・座敷棟から池へつながる流れ跡の検出
 - ・敷地西側の銭屋川に面して設けられていた高塀基礎の検出
 - ・第4章第1節では触れなかったが、坐摩神社西側、池北側の庭園北の空間地において石積みが2箇所検出(今のところ何のためのものか不明であるが、神社と関係するものと推定している)

⑤庭園の遺存状況は良好で、その特徴から近世末から近代にかけて作庭されたものと考えられるが、池については下段の縁石に積み方の異なるものが確認されており、庭園そのものの時期を新しくするものではなく、作庭時期はさらに遡るものと考えられる。

また、築山の東側は坐摩神社の境内となっており、築山が築かれた時期が、神社が地元の氏神として開放された時期と重なると考えられるが、それについて不明である。

座敷から眺めを想像すると、借景としての生駒山系と築山①の形状が相似形のようであり、また、築山②は遠景としてある二上山系・金剛葛城山系に重なる様であるが、想像の域を出ない。さらに強いて言及するならば、池の形状は新田開発前の深野池を意識しているのではないかと推測するが、これについても確たる根拠は無い。

以上、今回の調査結果から平野屋新田会所跡の現状の評価について簡単に記述する。

大和川付け替えによる一連の新田開発は、大阪平野の広範囲に及び、幕府が実施した開発工事の成功例として歴史的に重要な意味を持つと同時に、そのうちのひとつである深野池の新田開発は、本市の基盤を築いた意味において歴史的に大きな位置と役割を占めているといえる。

新田開発時に設置された会所については、敷地と建物が現存しているのは鴻池新田会所(東大阪市)、加賀屋新田会所(大阪市)、安中新田会所(八尾市)の3箇所に過ぎない。これら3箇所は国の史跡指定や

表2 新田会所対照表

会所	平野屋新田会所	鴻池新田会所	加賀屋新田会所
面積 (m ²)	6,800	15,462 (現存 10,662)	7,500 (現存 4,821)
表長屋門 (m)	112.5	48.0	137.0
冠木門	×	○	○
裏長屋門 (m)	48.0	71.6	×
主屋部 (m ²)	326.2	287.5	73.3
座敷部 (m ²)	112.4	98.0	70.5
店宅 (m ²)	△	103.8	55.9
土蔵	棟数・面積計	4棟 (245.4)	5棟 (475.5)
	屋敷蔵 (37.4)	屋敷蔵 (36.5)	土蔵 (45.0)
	米蔵 (132.0)	米蔵 (237.1)	-
	道具蔵 (46.0)	道具蔵 (103.4)	-
	土蔵 (30)	文書蔵 (28.9)	-
	-	乾蔵 (69.6)	-
庭園	形式	池泉回遊式／築山式庭園	池泉回遊式／平庭式庭園
	面積 (m ²)	2,000	2,600
	借景	生駒山	生駒山
	施設	流れ障 (?)、灯籠	障、灯籠 茶室風建物 (明洞亭)、 町屋 (偶然亭)、障、灯 籠
	樹木	クスノキ、ムクノキ、アラカシ、イヌガヤ、モミジ、イチョウ、モチノキ?、フジ、アカメガシワ等	クスノキ、エノキ、ムクノキ、アラカシ、イヌガヤ、モミジ、スギ、ヒノキ、モミジ、イスノキ、ヤマモモ、モチノキ、フジ等
	神社	坐摩神社	朝日社
土堀	△	○	△
濠	○	○	△
船着き場	○	○	×
その他施設	×	火の見小屋、白洲	中門
役宅	×	○	×
新田名	深野南新田・河内屋南新田	鴻池新田	加賀屋新田
開発地	深野池床	新聞池床	旧大和川河口干潟
規模	反別	74町1畝6歩(享保4年)	157町8反8畝(享保4年) 105町3反8畝(天保末年)
	石高	834石6斗3升8合(享保4年)	1706石8斗8升(享保4年) ?

市指定文化財等に指定され、保存と活用がなされている。平野屋新田会所も同様に保存され、市民に開放し、新田開発の歴史を後世に伝える文化財として活用されるはずであったが、今日の状況に至った経過は第2章で記述したとおりである。新田開発に伴い建造され、今まで同じ歴史を歩んできたはずであるが、取り巻く状況が違えば、結果は異なってしまうという、保存の難しさを改めて認識している。

しかしながら、今回短期間ながら会所について考古学的調査ができたことは、大きな意味がある。

おそらく敷地全体を対象に考古学的調査を実施した最初の例ではないかと考えられ、得られた成果に加え、まだ現地には、他の会所の様相を解明するうえでも有意義な情報がまだ内包されており、今回の成果は、そのほんの一部が確認できたに過ぎない。

今回は、調査が礎石の下部までに及んでおらず、主屋建物等の土台となる地業についても不明な点が多く、もともと池であった地盤の悪い土地に、どのようにして敷地を選定して、建物を建てていったのかを解明することが今後の課題である。そのためには、既存の文献等からの資料調査が必要で、解体時に回収した民俗資料や文書の整理を行っていくことが重要であると考える。

今後は多方面からのアプローチが必要と考えており、今回の報告書は最終報告ではなく、概要としているのも、将来的には総合的な学術報告書の刊行が必要であるとの考え方からである。

最後に、今回の調査にあたっては現場での3D測量、また、シンポジウムにおいてもその成果について講演をしていただいた土橋正彦氏が平成21年盛夏の頃、急逝されました。平野屋会所は、大東市のこれからの中づくりに生かしていくべき貴重な文化財であると、その保存と活用に期待をされていましたが、早すぎる逝去に驚くばかりです。謹んで氏のご冥福をお祈り申し上げます。

註

- (1) 梶山彦太郎・市原実「大阪平野のおいたち」1986青木書店
- (2) 大和川付け替えまで流れていた玉串川、久宝寺川、平野川等の前身である諸河川。
- (3) 清少納言『枕草子』の中に記述がある。
- (4)『藤原旗高譲状案』河内水走家文書・鎌倉遺文十ノ七四四五
- (5)昭和51年に国史跡、本屋、屋敷戸等の建物は昭和55年に国の重要文化財に指定されている。
- (6)当時平野屋又右衛門は十人両替の一員であった。
- (7)大東市史編纂史料目録第2集『平野屋会所文書目録』2005大東市教育委員会
平野屋会所において継承されていた古文書群で、何らかの理由で流出したものを平成12年に大東市が取得している。
- 近世から近現代に至る古文書・古記録・書類等から成り、文書中最も古いものは宝永五年(1708)から記された河内屋南新田年貢の「御定之写」である。
- (8)大阪市内(中央区九太郎町4丁目)にある生磨(いかすり)神社から分祀された。
- (9)助松屋忠兵衛も十人両替の一人。
- (10)大坂堂島船大工町天王寺屋源助。
- (11)白粉製造業を家業とする豪商、両替商も営んでいた。錢屋長左衛門は柏村新田(八尾市)とその会所も所有していた記録がある。
- (12)大東市文化財調査報告『旧平野屋新田会所屋敷と建物』2002大東市教育委員会
- (13)建物配置や庭園の形態は解体直前と大きく変化していないが、坐摩神社とその境内は畠敷地から分離していない状態で描かれている。現在、この写し絵図については、所在が不明であるとのことである。

(14)明治廿五壬辰年 地主 高松長左衛門

上棟 大阪新田方兼

拾貳月廿五日 営繕掛 高橋木兵衛

当新田住
全 補助 垂部房五郎
諸福村
大工棟梁 木中久吉
(15) 享保拾年巳三月朔日 出入方手伝人足
堤て建之 喜八内兵
地主 藤吉郎太平
上棟 高松長左衛門 メ四人
他 二多數人足
来ル事
当新田住支配人
植村 房五郎
支配人伴 吉太郎
明治式拾六年
癸巳式月廿五月(日?)修繕ス 諸福村大工棟梁 木中庄太郎
木中 久吉
松本 仙助
辻本 豊吉

(16) 解体時の1~2月には水が無い状態であった。

参考文献

- 『大東市史』1973大東市教育委員会
『近世大東の新田開発』1990大東市立歴史民俗資料館
中好幸『改流ノート』1992天理時報社
中九兵衛『甚兵衛と大和川』2004大坂書籍
『重要文化財仙鷲池新田会所 史跡鷲池新田会所跡修理工事報告書』1996東大阪市
日本民俗建築学会編『図説民俗建築大辞典』2001柏書房
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』2001柏書房
秋山高志他共編『図録農民生活史辞典』1979柏書房
尾上孝一『図解木造建築入門』1979井上書院
上原敬二『築山・池泉の小庭(小庭のつくり方叢書第3巻)』2005加鳥書店

図 版

図版一
会所全景



調査区全景（西より）



調査区全景（南より）



調査区東半部（北より）

図版二
主屋建物
(1)



主屋建物礎石（東より）



主屋建物礎石（西より）



主屋棟西側礎石（南より）

図版三 主屋建物(2)



主屋建物南側礎石
(西より)



主屋棟西側礎石
(南東より)



座敷棟東側縁側礎石
(南より)

図版四
主屋建物
(3)



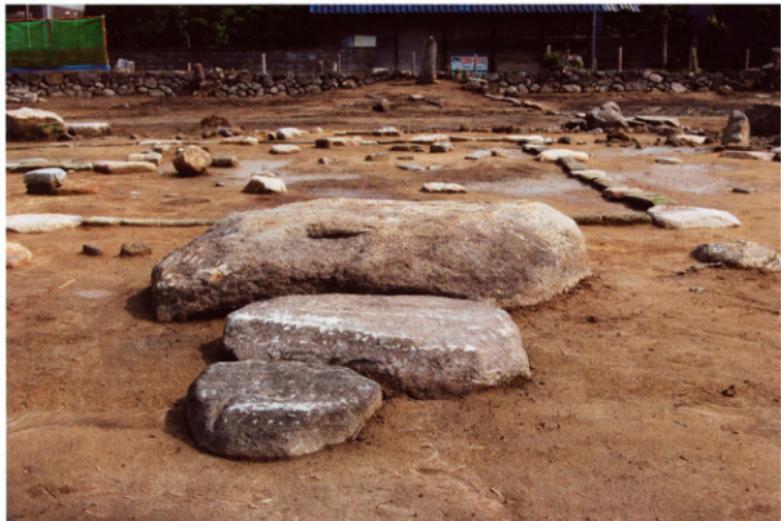
主屋棟土間入口（東より）



主屋棟土間入口（南より）



主屋棟土間・窯跡（西より）



座敷棟南側縁側・沓脱石（南より）



座敷棟玄関（南より）



座敷棟玄関（南より）



座敷棟玄関埋甕（南東より）



座敷棟玄関埋鉢（南東より）

図版六 表長屋門



表長屋門（西より）



表長屋門東側排水施設
(北より)



表長屋門西側居宅部分（南より）



表長屋門入口部分（西より）

図版七 裏長屋門



裏長屋門（南西より）



裏長屋門基礎（北西より）



裏長屋門基礎下部（北西より）



裏長屋門西侧塀基礎（北より）



裏長屋門東側塀基礎と主屋棟排水施設（北より）

図版八 土蔵①・主屋棟・裏長屋門（東より）



土蔵①・主屋棟・裏長屋門（東より）



土蔵①と主屋棟排水施設（南西より）



土蔵①（東より）



土蔵①内部（南より）



土蔵①内部（北西より）

図版九 土蔵②米蔵



土蔵②(南より)



土蔵②(南より)



土蔵②斜路(南東より)



土蔵②基礎底部(東より)



土蔵②基礎(西より)



土蔵③と船着場（南東より）



土蔵③（東より）



土蔵③基礎（南西より）



土蔵③基礎（東より）



土蔵③基礎・船着場（南より）



土蔵④(北西より)



土蔵④(東より)



土蔵④基礎(北西より)



土蔵④斜路(東より)



土蔵④斜路(北より)

図版十二 庭園(1)



庭園部（西より）



庭園南半部（北西より）



築山①全景（西より）



築山②全景（北西より）



築山①と②の間（北西より）

図版十三 庭園(2)



築山②（東より）



池・流れ蹲（北西より）



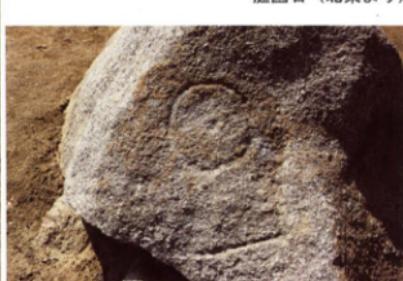
流れ蹲（南東より）



庭園石（北東より）



流れ蹲（北西より）



庭園石刻印（東より）

図版十四
池(1)



池（南より）



池（北より）



池（北より）



池南部分（北西より）

図版十五 池(2)



池北部分・流れ跡（南東より）



池南部分東岸（北より）



池石橋部分（北より）



池南部分東岸
(北西より)



池東岸（北より）



池南部分東岸
(北西より)



池西岸（東より）



池北端部（南より）



池南端部（北より）

図版十六 井戸





西側塙基礎（北西より）



北側石垣（南より）



北側石垣と坐摩神社西側礎石（西より）



庭園南部分塙布基礎（南より）



庭園北部分塙布基礎（南より）

図版十八
船着場



船着場（南西より）



船着場（北西より）



船着場と門礎石
(南西より)

図版十九 その他・周濠トレンチ



表長屋門から主屋建物へ続く道（南より）



道敷き石（南東より）



坐摩神社西側礎石検出状況（北より）



鉢出土状況（南より）



周濠確認トレンチNo.1（南東より）



周濠確認トレンチNo.2（東より）



周濠確認トレンチNo.3（東より）



周濠確認トレンチNo.3（北より）

図版二十 遺物(1) 陶磁器類・土製品・石製品・ガラス製品



図版二十一 遺物(2) 瓦



圖版二十二 遺物(3)木製品・金屬製品



報告書抄録

ふりがな	ひらのやしんでんかいしょあとかくにんちょうさがいようほうこくしょ						
書名	平野屋新田会所跡確認調査概要報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第30集						
編集者名	黒田 淳						
編集機関	大東市教育委員会						
所在地	〒574-0076 大阪府大東市曙町4-6 TEL072-870-9105						
発行年月日	2010年(平成22年)3月31日						
所収遺跡名	コード 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
ひらのやしんでんかいしょあとかくにんちょうさがいようほうこくしょ 平野屋新田会所跡 (H R N 08 - 1)	おおさかふ 大阪府 だいとうし 市 ひらのやし 平野屋 ひらのやし 1丁目 市町村 27218 遺跡	34° 42° 26°	135° 38° 6°	2008年 5月9日 ~ 6月13日	6680m ²	遺構遺存 状況確認	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平野屋新田会所跡 (H R N 08 - 1)	建物 濠 庭園	近世~近代	建物基礎 土蔵基礎 壠 井戸 池 築山 周濠 船着場	瓦 染付 陶器 木製品(桶門の 板・釜蓋) 石製品(石臼) 金属製品(銭貨、 火箸)	基礎が良好に遺存 し、建物は複数回 の建て替えが行われ たことを確認		

大東市埋蔵文化財調査報告第30集

平野屋新田会所跡

確認調査概要報告書

2010年3月31日発行

編集・発行 大東市教育委員会
〒574-0076 大阪府大東市端町4-6
TEL 072-870-9105
印刷・製本 株式会社ミラテック
〒534-0025 大阪市都島区片町2-9-9
TEL 06-6354-3081



米蔵と銭屋川（北西より）